
鬼人伝外伝 蜘蛛草子 社の盟友

伊倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼人伝外伝 蜘蛛草子 社の盟友

【Nコード】

N2489N

【作者名】

伊倉

【あらすじ】

初代皇帝により妖怪から人間に変えられたという伝承を持つ土御門家の槌也はご落胤だが、妖怪土蜘蛛の能力を持つ先祖がえりだった。鬼の末裔の一人風丸と封印の結び目である杜を守護していたが、兄の婚約者を迎えに行く事になる。

しかし、それは北の隠居の企みであった。縁談を妨害しようとする一味も現れ、異能をもつ男装の少女袖月に付狙われる。旅は困難を（あらゆる意味で）極めるのであった。

この作品は某雑誌の小説賞に応募して落選した作品を改稿してメビ

ウスリング掲示板に載せたものをもらったコメントを元にさらに改稿したものです。

社の住人（前書き）

この作品は某雑誌の小説賞に応募して落選した作品を改稿してメビウスリング掲示板に載せたものをもらったコメントを元にさらに改稿したものです。

以前に載せた「鬼人伝 血の誓約」と同じ世界観を持ち、登場人物も微妙にリンクしております。

社の住人

それはあまりにも醜悪な代物だった。さまざまなきき物が組み合わさり蠢もよほいている。獣の毛皮。鱗。羽毛。いくつもの顎あきに嘴くちばし。何対もの目。肉食獣のそれやら、鳥の目やら、蛇の目。

槌つち也は舌打ちした。

「融合すりゃあ、強くなるってモンでもねえだろうに、見苦しいんだよ！」

愛刀夜叉丸やしやまるを振るい、鋭い爪を生やした脚の一本を切断する。

痛みを共有したのか、全ての口が絶叫する。槌也は駆けて高く跳躍する。その高さは尋常ではない。何よりも、地面に脚をつけず、空に止まる。まるで足場があるかのようにさらに高みに駆けあがり、上空から切りつける。

ざくりと大きく切り裂き、槌也はそのまま落下せずに、横に引かれるように滑空した。

「ここは俺の縄張りだあ、好き勝手はやらせねえ。ここに出たことを後悔しやがれ」

繰り出される攻撃を身軽にかわし、ざくざくと相手を切り刻みながら、槌也は舌打ちした。相手は大して強くない。ただ、いくつもの魔が融合しただけに、大きさとしぶとさだけが厄介だった。

「弱い！ それでも物の怪かよ！ 人間のほうが、よっぽど手こたえがあつたぜ！」

血と肉をぶちまけつつ、槌也は吼えた。

己が作り出した血の海の中で、満たされぬ何かに憤っていた。

辺りを己の血と肉片で地獄絵図に変えた物の怪の息の根がとまると、槌也はやつと切り刻むのをやめた。原型が分からぬほど細かく切り刻んだのは、命をいくつも抱えていたため、細かくしなければ仕留められなかったのだが、仕留めたという満足感はない。

血刀を一振りし、血を払う。

「腕が……鈍っちまいそうだぜ」

> i 1 1 1 6 2 — 6 3 4 <

脳裏に浮かぶのは二人の男だ。おそらくは最強の鬼の一人と、自分と互角に殺しあつた剣鬼。強い相手と試合たいと思つのは、業だろつか。勝てないことは分かっている。死ん（それ）でも本望かなと思つてしまつが、役目を放り出すわけにはいかない。

「援護しなくても、よろしかったでしょうか」

涼やかな微笑を浮かべ、尋ねてくるのは相方だ。森に不似合いな小袖姿が妙に似合う。

「かまわねえよ。図体ばかりでかい、小物だ。これくらい一人でやらせるよ」

かけられた声にぞんざいな答えを返し、改めて血まみれの肉片に目をやった。辺りに漂うきつい血臭に眉をひそめ、口元を覆つた。その唇が微かに震える。

「要りますか？」

「……よこせ」

相方は妙な笑みを浮かべ襟を開こうとして 槌也は鬼の形相でとめた。

「馬鹿野郎。手え、出せ！」

「わたくしは、かまいませんのに」

「俺が、か・ま・う」

「何故ですか」

「気色悪いだろうが！」

相方 風丸三弥かせまるさんやはしぶしぶ手を出し、槌也は嫌そうに手をとつた。

（男色こゝれさえ、男色こゝれさえなけりやあ、悪い奴じゃねえのにつつ！）

この地は妖の気配の濃い土地也。未来永劫、子々孫々まで、この地を守護し、人を守れ。されば人の心と姿を与えん 土蜘蛛の

段より抜粋。

かつて、天下は魑魅魍魎ちみせうじょうの支配する世であったという。それを憂うれいた天は、天下を統一することになる初代様を降臨させた。

天より降臨したが故に初代様は名を持たず、数々の不思議な力を振るえたという。初代様は魑魅魍魎と戦いこれを鎮め、治世を築いた。

これにより初代様は御開祖様と呼ばれることになる。

御開祖様は人と交わり幾人かの子を得た。そのうちの男子四人が皇帝と葵御三家の始まりである。

開祖様には四人の息子があつた。長男を次の皇帝と定め、残りの三人の息子には葵あおいの姓を与え、西州にししゅう、南戸なんど、北張きたはりの地に封じられた。それぞれ西州葵、南戸葵、北張葵と称されている。開祖の血を引く者は多いが、葵を名乗れるのはこの三家のみであり、残りはどんなに近しい間柄であつても、予備血統家と呼ばれる大名となる。

この三家と皇帝は現在に至るまで、友好関係を保つため複雑な婚姻関係を築き、血の近さを維持している。

御開祖様は魑魅魍魎どもをすべて滅ぼしたのではなく、その血に宿る神通力で魑魅魍魎を人へと変え家来とした。言い伝えが正しければ、譜代や大名の多くは妖怪の先祖を持つことになる。

これが世に広められている建国話けんこくはなしではあるが、真実はもうひとつある。

妖怪の姿を変えた神通力が、代を重ねることに効力を減らし、先祖帰りを起こした妖怪が生まれること。御開祖様は自らの国を結界で包み、外からの魔の進入を防いだ。しかし、結界の結び目ともいうべき弱い部分があり、放っておけば魑魅魍魎が再び徘徊する世の中になる事。

それらは注意深く隠されている。

土御門つちみかどの家は代々、その結び目のひとつである杜もりを守護する任を、御開祖様より仰せつかっている。土御門の家にその能力を持つもの

がない場合、小角おじのの家から代行が使わされる。槌也は土御門の血に連なるものであり、風丸はその補佐として小角から来たものだ。小角の役目は結界の守護と、もうひとつ。悪しき先祖帰りを狩ることだ。

数刻後、槌也は口元を手の甲でぬぐった。

「落ち着かれましたか？」

風丸は軽く手をさする。

「ああ、おさまった」

「小物、とか、言っておられませんでしたか？」

「馬鹿野郎。おいのせいだ。この程度の相手で、本気になるかよ」

「帰りますか？」

「……そうだな……網にかかってねえし……そろそろ」

弾かれるように槌也が顔を上げた。くんと、空のにおいを嗅ぐ。

その瞳が赤く染まり、ある一点を凝視する。

「侵入者ですか？」

「外からだ。人間……だな。『お狩場』かりばだと知らないのか？」

杜もりと関係者が称す森は、『お狩場』として許されたもの以外の立ち入りを禁止してある。

槌也はいちど目を閉じる。再び開いたとき、その瞳は元の黒に戻っていた。

「鬼、杜の入り口まで運べや」

「はい」

とん、と風丸が軽く脚を鳴らし　そして一陣の風が吹き　—
瞬後、その場に二人の姿はなかった。

社の住人（後書き）

「マスカレイド」の続きがまだ書けていません。すでに書き終わっているこちらの作品を載せますのでお許しください。

応募作品書くので忙しいんです。ゴメンナサイ。

社の掟

肌に何かが触れたような気がして袖月は立ち止まった。

「なに？」

辺りを見回しても何も無い。それでも何かがあるような気がして、軽く目を閉じ、意識を集中する。霊視はあまり得意ではないが、それでも気を視る程度のことでは出来る。

はたして、霊眼で見ると、森には蜘蛛の巣が張り巡らされているように見えた。

蜘蛛の巣のように見えたのは、細い細い、糸のような気だ。それが幾重にも張り巡らされている。

（誰がやったのかしら。これは……罠？ それとも、結界の一種？）よくよく見れば、数本の霊糸が体にまとわりついている。このまま気づかずに進んでいけば身動きが取れなくなるところだった。

袖月は？力？を集中させ掌に力の結晶たる珠を作り出した。

短い気合とともに袖月はそれを打ち出した。霊糸は引きちぎられ霧散した。

性質の悪い、と袖月は毒づいた。この森は、代々領主の狩場とされ、猟や山菜取りはもちろん、立ち入りさえ禁じられているという。森ひとつを丸ごと独占しているとは、なんという贅沢だろう。森で取れる全てが、領主に捧げられ、周りのものがそのおこぼれに預かる。下々の者がどれだけ貧窮していようと、領主は気にもかけないのだ。

こんな、普通なら気づきもしない妙な技を使ってまで、独り占めにしようとは。

（これは、望み薄かしら。あまり、近づきたくない相手かも）

領主の一族とはいえ、つま弾きにされているものなら不満もあるう。それを上手く煽れば利用できそうだと考えたが、どうにも嫌な予感がする。厄介事ばかり起こしそうな相手なら、断念するべきだ

ろう。

「おい、誰の許しを得て、ここにいる」

いきなりかけられた声に袖月は仰天し、声の主を振り返った。
奇矯な形をした若い男だった。

元は悪くない。浅黒い肌、野趣の強い端正な顔。背も高くがっしりとしていて、戦国の世に生まれたならば己の腕だけで名を馳せただろうと思われるような、無骨な雰囲気を漂わせている。

奇抜なのは衣装だ。

髪も結わず短く切り、前面と後方を鎧うていながら、脇腹が、なんとむき出しなのだ。

たとえば、腹掛けだろうか。背中にも衣を使っていそうだが、前面と後方を紐で繋いでいる。脇腹を出すような衣装をわざわざ作らせたとは思えない。ほとんど半裸の衣装から鍛え上げたしなやかな筋肉が見て取れる。

まるで自らの体を誇示するのが目的のような姿だ。

袴も妙に細く仕立ててある。普通なら大小を差しているはずなのに脇差を持たず、飾り気のない拵えの大刀のみだ。

変わった趣味だ。と、袖月は思った。

これが土御門槌也。

現領主の腹違いの弟で、前領主の御落胤。体の弱い現領主に代わり領主の勤めを果たすといいながら、『お狩場』の杜に入り浸っているろくでなし。

男からは血と汗のにおいがした。

「なんだ、おめえ、妙な形して」

こいつには言われたくない。袖月はむっとした。

「き、奇妙なのは、そちらの方でしょう。どこから参られたのかは存じませんが、いきなり現われるので、驚きました」

一体どこから現われたものか。気づいたら目の前にいた。それまであれほどに気を張っていたというのに、気づかなかった。

「ああ？ 若え女が男のなりしてりゃ、妙だろうが」

袖月は二度驚かされた。若衆の姿をした袖月を、一目で女と見破ったものは、今までいなかった。せいぜい、女のような顔をした軟弱そうな男と思われるのが常だった。

「わたしを女子おなこと申されるのか。確かに顔は軟弱なれど、それはあまりに」

「女だろ。女より別嬪べっぴんな男なんざ、見飽きてるけどよ、おめえは女だ」

槌也が断言というにも当たり前すぎる口調で否定した。

「女子ですか、その方」

槌也の後ろに控えていた小袖姿の若者が言った。

女より別嬪な男とは、これの事だろうと袖月は思った。

やや目が細すぎるのが難といえ難だが、繊細に整った優しげな顔は見惚れるほどに美しく、涼やかな微笑を薄い唇に浮かべている。背は高く、槌也と同じくらいだが、ほっそりとした優雅な立ち姿だ。これが噂のお稚児さんだろうか。稚児というには歳を食っているように見える。槌也より年かさのように思えるのだ。

「ああ。おめえの所は、女より奇麗な男がごろごろしてるから、違和感ねえだろうがよ」

連れに答えてから、槌也が袖月に目を戻した。

「この辺りの者じゃねえな。ここが『お狩場』だって、知らなかったのか？ 悪いことは言わねえから、さっさと出ていきな。でねえと、命がねえぞ？」

脅されているのだと、袖月は思った。

「お咎とがめが、あるのですか」

「いや、そんなモンはねえけどよ」

がりがりと槌也が頭をかいた。ふっと視線をはずしてぽつりと言った。

「有りのままってやつだ。危ねえし 俺は、若え女、見ると喰いたくなるんだよ。さっさと出てってくれや」

かあつと血が頭に上った。

(こつ、この、好色男っ！なんて、いやらしい奴なの！)

思わず、？力？を使ってしまいそうになったが、袖月は懸命に我慢する。ここで騒ぎを起こしては、計画が台無しだ。

袖月は槌也に背を向けて、走り出した。

(なんて奴！ なんて奴！ 食いたいだなんて、いやらしい。あんなの、味方に引き込むなんて、とんでもない！ 一緒に天罰くらわしてやる！)

「なんだ、ありゃあ。なに、怒ってやがる」

いきなり怒って走り出した女に、槌也は訳が分からないとぼやいた。

奇妙な女だった。

年のころは十四、五。中々整った可愛らしい顔をしているのに、小姓の形をしている。それが妙に似合う凛々しさもあるのも確かだ。気も強そうだ。

兄に女を男装させて侍らせる趣味はないし、そんな特別な趣味の持ち主の噂は聞かない。『お狩場』だと知らなかったのを思えば旅の者だろうか。

案外、旅の用心に男の形をしているのかもしれない。女の旅は色々と物騒だと聞く。それにしても旅姿ではなかったのが気になると言えば気になる。

「怒りますよ。女子に、喰いたくなる、なんて言えば」

風丸は拗ねて横を向く。

「ああ？」

槌也はしばし考え込む。

「ああ、色欲そうちの意味にとられたか」

「普通、とります」

恨みがましい目で風丸が槌也を睨みつけた。

「ああいうのが、お好みなんですか？」

「おめえまで、色欲そうちの意味にとるなよ。分かってんだろ。食欲そのままの意

味だよ」

「それも、問題ですけどね」

風丸が溜息をついた。

「そのために、おめえがいるんだろつがよ、鬼」

「わたくしが治せるのは『生なり』までです。『降り』られたら、どうしようもありません」

「始末は、つけられるだろうが」

ふいつと風丸が眼をそらす。

「……それをやりたくないから、言っております。わたくしの気持ちはご存知でしょうに」

槌也は一瞬にして全身に鳥肌を立てた。必死に悪寒に耐える。

「……すまん……それだけには、応えられねえ。絶対に」

「分かっております……とうにあきらめてはいるのですが……ただ……」

風丸は頬を染めて俯いた。

「あなた様を恋い慕う心を、とめられませぬ……」

槌也は喉元までこみ上げる酸っぱいものを堪えた。背を向けたまま無言の早足で遠ざかる。

心の中では絶叫していたが、口にするわけにはいかなかった。男色これさえ、男色これさえなけりゃあ、悪い奴じゃねえのにつっ！ ちくしょおおお！ 何が悲しくて、てめえに懸想している野郎と暮らさなにならんのだ、俺は）

「網を直してから帰る。先に帰れ」

「食事の支度をしておきます」

風丸が一礼して、足を踏み鳴らすと、ふつとその姿が消えた。

一人になった槌也は網の状態をみて眉をひそめた。

「妙だな？」

網の破損状態があまりにも大きかった。普通の人間に壊せれるような規模ではない。かといって、物の怪の仕業でもないだろう。網が壊されたのを感じたから、直ぐに遠見を使った。あの女以外には

何もいかなかったはずだ。空気のおいを嗅いでも、あの女以外の匂いはしない。

だが、網は人間の力ごときでは、引き千切れもしないはずだ。まとわりついて、切れることはない。そもそも、ふつうの人間には存在さえ分からない。

「？ 何が網を壊した？」

嫌な予感を感じたが、槌也にできることは、とりあえず網をなおすことだけだった。

社の掟（後書き）

そういえば、この作品を載せたときメビでの友人が申し出ておりました。

男色とかイクラさんらしいと。

……私らしさっていったい……

縁談のつら

「お召しにより参上仕りました。兄上」

槌也は深々と頭を下げた。

「槌也。許す。頭を上げい」

兄守之あにもりゆきに促され槌也は顔を上げた。

短く切った髪はどうしようもないが、それ以外はごく普通の身なりである。

土御門守之は槌也とは腹違いの兄弟である。正室の子であり父亡き後、藩主を継いだ守之と、先代の落胤である槌也では身分が違う。顔を見るにも許しがいるといってもいい。礼儀は守らねばならない。守之は常日頃城にこもって藩政を取り仕切り、槌也は杜を守っていて、会う機会はほとんどない。どちらも疎かには出来ない大事な役割だ。城からの使いがあり、槌也は堅苦しい正装に身を固め、久しぶりに登城した。

そうして顔をあわせた兄弟は、あまり似ていない。顔貌はよくよく見れば似通ったところがないでもないが、受ける印象がまったく違う。墨を刷いたように黒々とした髪を、僧でもなくせに結えなほほどに切り、闇夜のごとき黒い目、よく日に焼けた浅黒い肌の弟と、抜けるように色が白く、髪や瞳の色も薄く、茶色がかって見える兄。

母親の血筋と、育ちの違いであろう。

優雅で繊細で、それでいて揺ぎ無い何かを感じさせる当主に、槌也は尋ねた。

「何用でございましょう」

「うむ、実はな、此度、わしは予備血統家の水野の三の姫を正室にするること相成った」

「それは、吉報にございます。めでたきことに存じます」

予備血統家とは、皇帝と三葵家の、分家のことである。皇族とは

皇帝と葵を名乗れる三家だけであり、跡継ぎ以外の男子が姓を賜り予備血統家を名乗る。その血筋は御開祖様の流れを汲み、その家との婚姻が許されるというのは、皇帝の覚えがめでたいということであり、誉れとされる。真実はもう一つ在るが、なんにせよ名誉なことである。水野といえば、北張葵の流れで由緒正しき家である。

「うむ、そこで、そなたに頼みがある」

「何なりと」

「姫を迎えに行つて欲しいのじゃ」

「迎えに……とは、如何なることにございましょう？」

守之は言い難そうな顔をした。

「皇帝の御厚意により、三年の間、姫をこの地に呼ぶことができるのじゃ。それで、道中の護衛に土御門からも人を出すことにしたのじゃが、榎也、そなたにも警護の一人として姫を水野まで迎えに行つて欲しい」

榎也は非礼も忘れ守之の顔を注視した。

「しかし、わたしには、お役目が……」

榎也の役目はそうそう替えが利かない。決して欠かすことの出来ない大事な仕事だ。

「それについては、小角から人が来る手筈じゃ。何の心配もない」

「小角から？」

その瞬間、榎也の中ですべての歯車がぴたりとあつた。顔が引きつるのを榎也は止められなかった。

「つまり……小角から人が来て……わたくしめが折り返し、水野まで姫を迎えに行く？　そこまで手間をかけ、なおかつ正室のお国入りを許す？　異例中の異例でございますな！　どなたの御厚意でございましょうや！」

声に咎める響きが混じるのはしかたない。

「榎也……そう怒るでない。どなたの意向が動いているかは、わたしにも分かる。じゃが、それを拒むことなどできようか」

「……言葉が過ぎました」

槌也は非礼を詫びた。

悪いのは守之ではない。裏で何事か企んでいる者だ。守之が予備血統家の姫君を嫁に貰うのはおかしくない。しかし、本来なら皇都に住むべき正妻がお国入りできるといふのは、どう考えてもおかしい。大名の正室と跡継ぎは、皇都に賜る屋敷に住まわせるものであり、特に正室は夫の領地に足を踏み入れることなく一生を終えることが少なくない。

誰が何を企んでいるのか、察することは簡単だ。誰がといえ、噂に聞く北張葵のご隠居だろう。何をといえ、口にするのもおぞましい事だ。

だが　そこまでしても警戒しなければならぬのだ　槌也は？先祖帰り？であり、一度？降ろし？かかっている。おそらく自分以上に警戒しなければならぬのは、本家本元の鬼、小角の跡継ぎ小角猛流おづのたけるだけだろう。猛流は、？鬼降ろし？をしたことがあるという。

そのときは、多くの犠牲を払い、「鬼人きじん」に戻したというが、その犠牲の意味を考えると、身の毛がよだつ。

だが、もしも槌也が？降ろし？てしまったその時は、この地に？還かえす？ことのできる御開祖様の血筋のものはいない。せいぜい鬼が後始末をつけるだけだ。

それとて確実ではない。

だからこそ、人の道を踏み外させてでも槌也の身を固めようというのだ。

そこまで分かっていたが、やはり嫌悪は感じる。何よりも腹が立つのは、守之を巻き込んだことだ。

企みが分かっているとしても、拒否することは出来ない。皇帝の命に従えないとあればどのような沙汰が下りるか。罰しなければ大名の手前収まりがつかない。穩便に済ますには従うしかない。それが分かっているの沙汰だ。

(根性悪いぜ、北の隠居っ！)

槌也にできるのは、兄の命に従うことと、腹の中で北張の隠居を罵ることだけだった。

「この身にあまる大役ではございますが、水野の姫様が何事もなく、お国入りできるよう、この槌也、誠心誠意を持って勤めさせていただきます」

槌也は深々と頭を下げた。

「……うむ、頼んだぞ。槌也」

殊勝に頭など下げてはいるものの、槌也の全身からは不本意だといわんばかりの気配が立ち上っていた。

守之はそれを察していたが、気づかぬ振りをして黙殺した。この程度の腹芸は、当主ならできて当たり前なのだった。

「よろしいのですか？ あのような者に任せて。間違いがあつてからでは遅いのでございますよ」

「かまわぬ」

守之は内心溜息をついた。

槌也が下がって直ぐ口出ししてきたのは家臣の一人だが、土御門の真の姿を知らぬものである。

槌也の存在については、様々な噂があることを守之も知っている。好意的な噂は何一つない。だが、家臣の言葉は、噂を鵜呑みにしているのではない。むしろ家臣の誰かが槌也を貶めるべく流した噂だと守之は知っている。

妾腹ですらない一度の間違いで産まれた槌也に好意を持つものは皆無だといつてもいい。あからさまに陰口を叩くものもいる。

そもそも落胤らくいんであること自体を疑うものまでいるが、槌也はむしろ土御門の血が強く出た。土御門の業いごを一人で背負っているような存在だ。

土御門とはいえ、守之はふつうの人間と何一つ変わらない。守之では杜の守護は務まらないのだ。

皇家の血をたびたび取り入れてもなおかつ、一族の者の大半が何

らかの能力を持つ小角と違い、土御門では六、七代に一人その能力を持つものが産まれるかどうかだ。

このたび六代ぶりにその能力を持って生まれたのが槌也であり、完全に祖先の能力を受け継いだ『先祖帰り』であった。

守之は槌也に対して負い目がある。後で生まれた槌也が土御門の業を引き受けてくれたような気がする。土御門の血を受けて生まれてこなければ、槌也の生涯はどれほど心安らかなものであったことか。その力のない自分に代わり、修羅のごとく、魑魅魍魎と戦うことなどなかっただろう。

「しかし、やはりここは、信頼の置ける古参のものに任せられた方がよろしいかと」

相手の腹積もりはわかっている。このような大役を任せられるのは名誉なことだ。その名誉をどこの馬の骨とも分からぬ槌也に取られたくはないのだ。名家のだれそれに行かせるべきだと続けるつもりなのだろう。

「わしは槌也を信頼しておる。そなたが槌也を信頼できぬというのなら、その根拠を申してみよ」

「それは……お耳汚しではございますが」

「噂ならば、聞かぬぞ。そなたがしかと確かめたことのみ申せ」
守之はびしゃりといった。

槌也の生母は下級武士の出である。誰の子か言わなかったために槌也は伯父の二人目の子供として育てられ、幼いうちに皇都ていとに剣の腕を磨くため行っている。

その先で騒ぎを起こし、先代の落胤と分かったのだが、国許に戻ってから杜にこもっていて、顔を合わすのもめったにない。その所業など知るはずがないのだ。

「……槌也様は御落胤とはいえ、下級武士の子として育てられたとか。それでは礼儀や約束事も心もとないかと。水野の姫様にご無礼があつては。ここは礼儀を心得たものをいかせるべきかと」

「かまわぬ。槌也は我が弟じゃ。それが迎えに行くことで、天下に

土御門がどれほどのこの婚姻を大事に思つておるか、知らしめることができようぞ。水野の姫も不快には思わぬはずじゃ。そなた、このような大役、ほかの誰にできると申す？」

この程度のこじつけは想定のうち。それに対する策も講じてある。藩主の弟という身分を考えれば、頭を下げなければならぬのは家臣どもの方なのだ。

「そ、それは……」

「槌也は我が舎弟じゃ。先代の子じゃ。下級武士の次男坊ではない。それを忘れるでないぞ。よいな、柿崎」

守之はきつぱりと言いつつ論議を終わらせた。

「すぎたことを申し上げました」

筆頭家老は頭を下げた。

守之は溜息をついた。

心無い噂まで立てられ、日々命を削る不憫な弟を思えば、北の隠居の謀に乗ることなどどれほどのものか。

皆は生まれも定かではない槌也が間違いを犯すのではないかと心配しているようだが、それこそが、夏姫を御国入りさせる目的だとは言えない。

すでに夏姫には話を通してあるという。後はなりゆきに任せるしかない。まさか、命じるわけにもいかないのだ。

（許せ、槌也。兄にはこうするしかないのじゃ。すべてはお前自身のため、土御門のため、ひいては天下のためじゃ）

槌也の事情

「それで怒っておいででしたか」

風丸は膳を設えながら溜息をついた。

杜の庵には人がいない。その質素さは噂を鵜呑みにしたものが見れば驚くだろう。風丸ひとりがついて槌也の身の回りの世話をしている。

槌也が相談できるのも風丸一人だ。

「小角から人がきたら、すぐに水野の家まで迎えに行かなきゃならねえ。他の隨身すいしんはもう選抜済みだし。そっちは、何も言っていない。こなかったか？」

「若の代わりのものが参るといふ連絡は受けました。四日程で参ります」

小角は言葉を使わず、どれほど離れていても心と心で会話する？心話しんわ？という力がある。

「えらくかかるじゃねえか。おまえみたいな技は使えないのか？」

「連絡は？心話？で一瞬ですが、他人を連れて？跳とべる？？舞人まいびと？は、小角にもそれ程いません。歩いてまいります」

「なんにしる、大掛かりなことさ」

槌也は食事を始めた。

実は四日というのは、かなり早い。健脚のものが来るのだろう。

皇都から土御門の治める地までは、ふつう八日ほどかかる。

姫を迎えにいくのに相応しい行列をしつらえ女足にあわせるとなれば十日はいる。それを考えても、少なくとも水野家につくのは半月も先だ。そこから折り返し、戻るとなると、帰り着くには一月弱かかることになる。

その間姫の安全と健康に気をつけなければならぬ。考えるだけで荷が重い。

槌也はできれば人の中にいたくない。杜の中には人はおらず、何

よりもいざというときは風丸がいる。だからこそ安心していられる。しかし道中では風丸はいない。杜に残って代役の手伝いをする事になってる。風丸がいなくなれば、まさかときの抑え役がいなくなる。

一番の危険は、槌也自身だ。

何よりも透けて見える企みが気に入らない。

「裏が見え見えじゃねえか。警護が薄くなれば、俺が何かすると思
い込んでねえか？」

「……それだけ、恐れておられるのでしょうか。？先祖帰り？は、若
と、本家の若君だけですゆえ……策にのるつもりは？」

「殴るぞ」

「でしたら、何も問題はございません。ようは若がしっかりしてい
れば何事も起きません。策は不発でございます。まさか、密通
しろなどと誰が言えます？」

「……そうだがよ」

「お怒りは分かりますが、それだけ若の？先祖帰り？を恐れてのこ
と。なんとしても抑えたいと思うのは、北のご隠居だけではありません
すまい。かといって」

「部屋住みに皇帝血筋を降嫁させるわけにもいかない。そこら
辺は、おまえんとこの若さんより問題だな」

槌也が藩主、もしくは跡継ぎであれば、血の濃い予備血統家の姫
を与えればそれですむ。しかし、落胤の部屋住み次男となれば、姫
を与えようにも他の大名から抗議が来ることは必至。それゆえの非
常の策である。それは分かる。分かるが　あまりにも酷すぎる。

このたびの事も大名の非難をかわすため、夏姫は嫁入り前の物見
遊山に来ることになっているのだ。

小角の？鬼降ろし？の若には、皇帝の娘が許嫁しいなずけと言つ名目であて
がわれている。この姫の実母が、北の隠居の実娘で、北の隠居は皇
帝の舅ということになる。

槌也は会ったこともないが、非情の策を練る策士という噂だ。

「それよりも、若の代りともなれば小角の中にもそれほどいませんよ。そちらの方が心配です」

「いるだろ。例の……あいつとか」

ふと、槌也の脳裏に？鬼降ろし？の若をのぞけば小角最強と思われる二人の鬼人の顔が浮かんだ。

風丸がきりりと袖を噛んだ。

「あちらの方は、若の御付きで忙しいかと……それに……あの方と二人になるのは わたくしがつらいのですが」

「そうか、初恋の相手だったな」

槌也は鳥肌を立てた。風丸は横を向き、そつと涙をぬぐった。

「 どうしてわたくしが懸想^{けそつ}する相手は、男色に興味がない人ばかりなのでしょう」

数年も二人きりでいれば雑談くらいはする。気安くなれば身の上話もするし、何かの拍子に人には言えない秘密を打ち明けたりもする。おかげで槌也は三弥の身の上について、かなり詳しくなっていた。逆もまたしかり。

そのうち風丸が槌也に情が移ったらしい。

「あいつに、剣鬼のあれ、それに俺か。似ているような、いないよ うな……」

「あなたが同族で、男同士でも身を固められるのなら、わたくしはいくらでも協力いたしますのに……」

槌也は茶碗を取り落とすた。

「……やめろ、飯が食えなくなる……」

男同士では身を固められない事に槌也は感謝した。槌也に男色の気はない。それはもう、きつぱりと。男の求愛など、身の毛がよだつ。全身の血が凍る。

小角にも御開祖様の血は流れているが、人外の血が混じると、身を固める効果は同族にしか効かなくなる。そうでなければ、鬼の嫁を押し付けられたかもしれない。

もつとも、蜘蛛と鬼の血が混じると何が起こるのか、槌也にもわ

からない。それほどの危険はさすがに誰も冒さないだろう。

岡部孫兵衛の証言

その日、岡部孫兵衛は緊張と興奮で体をいっぱいにしていた。おかへまごへえ

岡部の主である土御門守之が正室を持つというのだ。その姫君は予備血統家の姫。皇帝の温情で姫君は土御門の領地に参られる。

岡部はその迎えの一人に選ばれたのだ。なんと、光栄であることが雪のように真っ白な髪と口ひげを持つ初老の岡部はしきりに口ひげをいじった。

「このようなお役目を任されるとは、ほんに名誉じゃな、幸太郎」「しつたろう」

「はい。真に誉れと存じます。ですが小父上、幼名で呼ばないでください」

朴訥を絵に描いたような巨漢早川芳幸は岡部の遠い親戚にあたる。ほくとつ早川にとって武芸の師匠でもある岡部は、いつまでも頭の上からない相手だ。

道中の護衛ということで、何人もの腕利きが選ばれたが、早川は特に幼少のところから岡部が直々に、しごきにしごいた愛弟子だ。

護衛の中でも随一の腕前であろう。

「ですが、大変なお役目でもありませんな。あの、槌也様もおられる」

「むう、守之様の唯一の御舎弟ゆえのう」

早川の言葉に岡部も眉をひそめた。

「悪い噂しかききませぬ。曰く、両刀でお気に入りのお稚児さんと暮らしながら、気が向けば領地内で若い娘に狼藉を働く。曰く、酒を浴びるように呑み、酔っては乱暴を働く。料金は踏み倒し、領民を泣かせている。などなど、一々あげればきりがありません」

「むう、先代様を思い出すのう……」

先代守繁は、現役のところから国許のことは一部家臣にまかせつきり、遊び歩いていた。

皇都にあつて、藩邸を取り仕切っていたのは嫡男守之であり、守繁は名ばかりの当主であった。

守繁という男は好色で、何人もの側室を抱えるばかりか、領地にあつては度々目に付いた娘に手をつけている。

跡取りである守之は父守繁の所業に眉をひそめていたという。

このような当主を抱えながら、土御門がびくともしなかつたのは、家臣と跡取りがしつかりしていたのと、大大名という家柄のおかげである。

「血のせいかのう」

ところで この土御門槌也という男、三年ほど前に振ってわいたような御落胤である。

見つかつてすぐ土御門に受け入れられたものの、『お狩場』にもってめつたに出てこない。

おかげでその人となりは、悪い噂は多々あるものの、誰も知らない。

しかし耳にする噂は前当主を思い起こさせる。それ故に、誰もがそうと思ひ込んだ。

「姫様に無礼があつてはいけません」

「うむ、いざというときは、この孫兵衛、命をかけてお諫めせねば」
すでに槌也が行くことは決定事項であつた。いちおう、責任者ということになつてはいるが、実質は岡部孫兵衛が仕切ることになる。すでに迎えの人間も決まり、道筋や宿の手配もすんでいる。それらの手配は岡部が済ませた。槌也はついていくだけだ。

槌也とは今日始めて顔をあわせ、迎えの道中の打ち合わせをすることになつている。岡部も早川も、槌也と顔をあわせるのは初めてだ。

「槌也様が参られます」

「うむ、お通しいたせ」

障子の向こうから声がかかけられ、部屋にいた一同は居住まいを正した。

障子が開けられ、はいつてきた若者に、岡部は瞠目した。

浅黒い肌に、墨を刷いたような黒い髪、大柄な体躯。髪を短くし

ているのが妙といえは妙だが、事前に噂を聞いていなければ、たいそうな偉丈夫と思ったことだろう。

「初にお目にかかる、土御門榎也と申します。岡部殿の噂は常々耳にしておりました」

榎也が殊勝に頭を下げた。

「初にお目にかかります、岡部孫兵衛。これなるは、一族の者で早川芳幸と申します」

形式的な挨拶が交わされ、榎也は薦められるままに上座に着いた。その様子に岡部と早川は瞠目した。

続いて岡部と早川も自らの席に着いたのだが、一瞬、榎也の目が鋭くなった。

ある程度の武芸を習得したものならば、普段の動作にも無意識にその動作が出る。目配り、足運び、体さばき、それを見るだけで相手の力量が少しはわかる。

歩いて座る、それだけの動作に互いに感じるものがあつた。

(できる……)

互いにそれだけは心に留めた。

「では、道中の打ち合わせをいたします」

岡部は地図を広げた。

「まずは、行きですが、これはなるべく早くお迎えに行かねば御無礼と思ひ少々きつい道のりになります」

「いちおうの予定が説明された。かいつまんで言えば、行きは急ぎの険しい道を進み、帝都で水野の姫御一行と合流。帰りは日数はかかるが女足にも優しい緩やかな道を行くということだ。」

「ここまで榎也は異を唱えず大人しく聞いていた。」

「天気しだいですが、予定はこうなっております。ここまではよろしゅうございますか？」

「ごもつともかと」

榎也が鷹揚に頷いた。

「榎也様には道中、宿直とくのちがつきますので」

「宿直？ なんの戯言ですか？」

「戯言ではござりませぬ。槌也様は殿のたった一人の弟君、もしもの事あらば、なんといたします。」

槌也は顔をしかめた。

「この槌也は、姫君の護衛。護衛に護衛がつくなど、聞いたことありません。無用に願います。」

「しかし、ですな。」

「無用。」

槌也は譲らなかった。

その後、岡部がなんと言おうと頑として護衛がつくのだけは許さなかった。

「続いては道中の槌也様の馬のことですが。」

「馬には乗らない。」

「は？」

槌也が顔をゆがめた。

「乗れない。」

槌也が下級武士の出だということを岡部は失念していた。いまだきの下級武士なら馬術を習わずにきていても不思議ではない。

「これは、馬術は不得手でございますか。では、一番大人しい馬を用意いたします。だれぞにひいてもらえば。」

「いや。馬とは相性が悪くて、近寄るだけで逃げ出す。無理だろう。」

「そのようなことはございますまい。何事も試してみなければ。明日、大人しい馬をそろえておきますので、おためしを。」

「無理だと思うが、それで納得するのなら。」

その点を除いてはほぼ合意が得られ、最初の打ち合わせは終わった。

槌也は挨拶を済ませ、部屋を出た。槌也とすれ違ったとき、岡部はわずかな血臭を嗅ぎ取った。

岡部は思わず槌也の後姿を見送った。

姿といい足運びといい、かなりの使い手と見たが、噂どおり血の

臭いが染み付くような生活をしているらしい。

岡部は内心がっかりした。

（よき若者に見えるというのに、なんとも残念じゃな）

妖の血族

夏姫の迎えを頼まれてから四日が過ぎた。狩りの合間に打ち合わせや予定の吟味などを行い、さすがの槌也もやや疲れ気味だ。

それも今日で終わる。小角からの代役の来る日だった。槌也が出立するのは、明日ということになる。

槌也は風丸を伴い、小角の使者を唯一結界の開いている杜の入り口まで迎えに行く。

「以前にも言いましたが、策に乗るお積りはないのですか？ 確かに、おぞましいことではありますが、それで身を固められるのなら、それはそれで……」

何かを言い含められたのか、風丸が問題を蒸し返した。

「好きでもない女ア、抱く気にもなれん」

「……前に、惚れた女に蜘蛛の子生ますのはかわいそうだから抱かないって、言ってますでした？」

「言った」

「惚れた女も、好きでもない女も抱かなかつたら、何を抱くんですか？」

しばし間があいた。

「……一生、清い身を通してやらあ」

浅黒い顔に微かに血の気を上らせて、槌也が言い捨てた。風丸も頬を染める。しかし、その表情は嬉しかおそうだった。

「清い身だったんですか……わたくしでよろしければ、色の道を教えて差し上げましょうか？」

槌也が足を止めて振り返った。形相が変わり、全身から殺気じみた気迫を発している。

「気色悪いこと言っな！ 男とやるぐらいなら、自決するぞ、俺はああ！」

「そんなに気合をこめなくても……わたくしが嫌いなんですか」

「そういう意味ではな!!」

風丸は涙した。

「子供を残すのも、義務のうちでしょう?」

土御門は代々子供ができ難い。槌也の父親である先代も、好色で何人も側室がいたにもかかわらず二人しか子供はできなかった。その先代にも兄弟がなく、二人の子ができたのは四代ぶりだという。落胤の槌也が土御門に受け入れられたのはそれもあるらしい。四代前の子は、一人は姫なので男の兄弟がいるのは珍しい。

このときの男の方は子ができず、妹姫の生んだ子を養子としてもらい後を継がせている。それが守之と槌也の祖父に当たる。妹姫の産んだ子もその子一人だという。お家騒動とは縁遠い血筋である。

土御門は杜の守りを任されている血筋だけに、できれば続いて欲しい血筋なのだ。

槌也はいざというときの予備らしい。

「いらん。兄上にまかす。跡継ぎでもねえのに、皇家筋の嫁もらうわけにはいかねえだろうが。人間の女なんぞに産ませた日には、蜘蛛だらけになんぞ。おめえこそ、子供作れや。小角でも、おまえみたいなのは貴重だろう」

槌也は先祖帰りだ。皇家血筋の女に産ませてもしない限り、その子供も槌也の同じものとして生まれてしまう。だからといって、跡継ぎでもないものに皇家筋の姫を降嫁させるわけにもいかない。そんなことをすれば、事情を知らない大名どもの非難を買う。

風丸がぼそりと言った。

「……わたくし、子供を産めないんです」

「男は、普通、産めん」

槌也は厳かにいい、風丸が悲痛な声で続けた。

「わたくしが好きになった人も、子供を産めない体なんです」

槌也は厳かに言った。

「男は産めん」

絶対の真理である。

男に子供は産めない。

風丸が滂沱ほうたと涙した。

「それでどうやって子供を残すんですか。無理です。」

「ああ、俺が悪かったよ。絶対無理なことを言った。」

「分かってて、言ったくせにつつ。酷いです。」

男色家の悲痛な叫びであった。

「舞人まいびと?? 楽人らくしん?? 心話しんわ?? 遠見とあみ?? 癒し人いやしびと?? いくつもの能力を

併せ持つ風丸の力は小角でも貴重だが、それを伝えるべき子供を風丸は得られない。

妖の血族（後書き）

あー、もしかして前半槌也と風丸のBL風味ラブコメで引っ張ってます？

もしかして、この作品ラブコメ？

そ、そんなバカな。シリアスのはず………というか、この後もラブのないラブコメ路線のよーな………って、コメディーか！！

後藤十五 もう一人の鬼

槌也は足を止めて空気のおいを嗅いだ。

「きましたか？」

「ああ。おまえ以外の鬼のおいがする……気のせいか？ どこかで嗅いだことがあるような……」

獣道のように細い道を通り、人影が見えた。近づくとつれ、それがかかなり大柄なものであることが分かった。槌也も背が高い方だが、それよりも頭ひとつ分は確実に高い。肉付きもよく、均整が取れている。それほど大きくても鈍重な印象はない。惚れ惚れするほどの巨体を滑るような足取りで運ぶ。

その姿に槌也は覚えがあった。

男は編み笠を取った。凜々しく整い峻厳な雰囲気を漂わせる容貌である。

「お久しゅう、槌也殿」

「……五藤、なんでおまえがここにいる！」

唸るように槌也が問いた。本来的ならば、この男は小角の若君のお目付け役なのである。

「代役を仰せつかりましたもので」

「てめえんとこの、若はどうしたよ！ 身を固めたのか？」

「いえ、そちらのほうはまだ……千騎がついております。どうにも人手が足りず、この五藤が仰せつかりました」

「鬼どもも、手がたりねえか？ そんなんで大丈夫かよ」

「数はともかく、封印の地の守りとなると、質がいりましよう。あの程度の力あるものはすでに何らかの役目についております。一月ほど代役の効くものとなると、そうはおりませぬ故」

「……ひとつ聞くが、俺が迎えに行くより、鬼どもが送ってきたほうが、面倒がないんじゃないかねえか？」

「そうですねが……槌也殿が迎えに行くことが肝要だと聞いてお

りまする」

「……気に入らねえな……」

五藤は首を少しかしげた。

「その、口の利き方と、目的がよ！」

抜く手も見せず槌也は抜刀していた。尋常の相手なら、そのままから竹割りにされているところだ。

しかし五藤十五いづみごさは、錨迫り合いの形でそれを受け止めていた。

槌也の後で抜いて、槌也の刃を受け止めたのである。

槌也の筋肉は隆起し、手加減しているようにはまったく見えない。全力の一撃であった。それに対して、五藤のほうはさして力を込めているようには見えなかった。

「俺が兄嫁と密通するのを待ってるみてえじゃねえか」

「落ち着け。俺に言われても困る」

五藤は少し困っているような顔をした。その間も全力の錨迫り合いは続いている。

「……まあ、それを望んでいる御仁がいるのは確かだな」

五藤の口調は昔のそれに戻っていた。

「あんの、北の老いぼれ、皇帝の舅だからって、好き勝手やってんじゃねえか？」

「わかっているなら、俺に当たるな。夜叉丸が欠けるぞ」

ふんつと鼻を鳴らして、槌也は刃を収めた。

「また、腕を上げたみてえだな」

立ち振る舞いだけでも、さらに腕に磨きがかかっているのが分かった。

「なんで、そんな刀、持ってやがる」

「いい刀だろう」

五藤は刀を納めた。五藤の大刀は名工の手によるもので、大枚をはたいてでも手に入れたと言う者も多いだろう。しかし、槌也は顔をしかめた。

「……ただの？いい刀？じゃねえか。名刀でも、普通の名刀じゃあ、

魔は切れねえ。夜叉丸、貸そうか？」

「いらん、俺には必要ない」

「……そうか、？鬼をも斬る剣？の持ち主だったな、お前……鬼のくせに……」

小角の家は、？先祖帰り？の始末と封印の守護を受け持つてはいるが、表向きは指南役として皇帝に召抱えられているという形を取っている。

しかし、皇帝が小角の剣を教えられているわけではない。皇帝の剣術指南役は他にあり、何のために召抱えられているのか分からない、ほとんど飾りだと、実体を知らぬものは嘲る。

武芸者にとつては、小角鬼神流といえは、他に例を見ない血統お止め流という掟がある謎の流派である。小角の血筋のものだけを門弟とし、門外不出。たびたび開かれる武術大会にもまったく姿をみせず、稽古すら、垣間見ることもできない。他流試合は一切受け付けず、本当に強いのかも疑われる。

しかし、それも真実を知られば仕方ない。

小角の者は男も女も総じて体格がよく、その強力しつじきや速さは飛びぬけている。それもそのはず、小角は人ではないのだ。度々三皇家といわれる葵の血を取り入れてなお、多くの者が断片的に先祖の神通力を受け継いでいる。

これで常人と試合えば、勝つのは分かりきっている。

妖怪退治を前提とし実戦で磨き上げられた腕に適うものなど多くはない。

天下大平の世に生まれ、武芸など振るう機会などなく、道場剣術と成り果てた剣しか知らないものに、人外の者相手に実戦を積んできた小角に適うとすれば、それこそ剣の道にすべてを捧げ剣のみで生きる剣鬼となつたものだけだ。

世が大平でいられるのはこの小角の力によるところが多い。妖怪を倒すことのできるものは少なく、皇家は小角を擁護している。

小角もまた、人であり続けるために皇家に仕えている。

この五藤の変わつたところは、鬼として生まれながら、なおかつ神通力を抜かしても剣鬼と呼ばれるものだけが開眼する？鬼をも斬る剣？を習得していることである。

人として生まれていても、やはり剣鬼になつていただろう。

おそらくは、小角の中でも最強の名に最も近い男だ。

「剣鬼の旦那は達者か？」

「ああ、達者だ」

「死んだつて聞いたぜ」

「あれは……」

「『死んだ』ことにしたわけか。指南役の跡継ぎを、小角の入り婿にするわけにはいかねえからなあ」

「……分かつているなら聞くな……今は鬼成十衛きなしじゅえと名乗つておられる。そのうち小角の中から連れ合いが選ばれることになるう」

「？きなり？？おにになる？か。旦那らしいねえ」

鬼成十衛と名乗っているのは、皇帝の剣術指南役の嫡男である。武門の家に生まれたということもあるだろうが、この男、剣術にすべてを捧げたまさに剣鬼である。

幼少のころよりその才能を謳われ、日々剣術の腕を磨くことに加え、天下無双といわれるまでの強さとなつた。

小角鬼神流に興味があり、極秘に行われた皇帝の御前試合の、優勝の褒美に何が欲しいか尋ねられ、小角鬼神流との真剣試合を所望したという。願いは聞き遂げられず、それでも鬼神流との勝負を熱望し続けた男である。

槌也の師事した師匠が指南役と交友があり、その縁で顔をあわせ、なぜか気が合い、年の離れた友人として付き合っていた。

皇都での騒ぎは、この男との付き合いがなければ起きなかった。

この一件で槌也は土御門の家に入り、男は死んだことにして名を捨て、小角に取り込まれることとなつた。真実を知られ、記憶の改ざんもできぬ特異な能力者を一族に取り込むことはよくあるらしい。同族婚の多い小角にとってはそれも必要なのだという。

「妖怪退治に混ぜろって言ってるじゃないか？」

「……何かあったら声をかけるといわれている……」

「味を占めたかよ。俺との勝負、気に入ったらしいな」

「つまりらぬ時代に生まれたと思っていたが、そうでもなかったかと喜んでいゝ」

「……まあ、こんなことでもなければ、鍛えた腕を振るう機会もないからな。置いてきたのか？」

「当たり前だ。人間だぞ。腕はともかく、肉体が脆い。我々とは違う。こんな妖怪だらけのところへ連れてこれるか」

いくら？ 鬼をも斬る剣？の持ち主とはいえ、肉体的には人間ではない。人間としては頑強だが、頑丈な小角や槌也とは比べ物にならない。限界がある。

「知られたら拗ねられるぞ。俺もおかげで日々腕を磨いてるよ。まあ、相手が物足りないがね。旦那のほうの手強かったな。また、機会があったら旦那とも戦^やりたいよな」

五藤が呆れたような顔をした。

「腕二本、落とされても足りないのか？」

「余分な腕だったからな。くつついたし」

槌也は脇腹を撫でた。

五藤は天を仰いで呟いた。

「噂には聞いていたが、凄いな」

常人には視えないだろうが、五藤の霊眼はそれを捉えていた。

「ああ。結界の結び目に、俺の結界をかぶせて小物を威嚇しているからな。もともとあんまり妖気のでかい奴はこっちにこられないし、小さい奴は俺の気配に怯えてこない」

「おまえの気配に怯えない奴しか来ないか。それはそれで厄介だ」

「おまえなら大丈夫だろうさ」

俺より強いから、とはさすがに口には出来ない槌也だった。

「結界を壊してしまうかもしれないが……いや、確実に斬ってしまうだろうが、直せないぞ。俺達の張る結界とは質が違うからな」

「それは、まあ覚悟の上だ。帰ってから直すさ。妖怪が外に出なければいい。結界を閉じておくから、出入りは？跳んで？くれ」

「承知した」

すつと五藤の視線が風丸に向けられた。

「久しいな三弥。何も分からぬ故、手数をかけると思うが、槌也殿が戻るまでよろしく頼むぞ」

悪気は 他意は ないのだろうか、何も知らない五藤は、同性である槌也の眼から見ても魅力的な、爽やかな笑顔をふりまいた。「は……はい。十五様にはお久しぶり。至らぬところもあると思いますが、精一杯努めさせていただきます」

風丸と五藤は同じ一族の出である。もちろん面識があり、五藤にとって風丸三弥は兄二人と同じく同胞だが、三弥にとって五藤は初恋の相手だった。

むろんまったく男色に興味のない五藤には、想いを打ち明けることもできず、諦めたらしいのだが、その張本人と人を交えず二十日ほど暮らさなければならぬのだ。風丸の心中いかなるものか

人が口出しするものでもないし、聞かされたとしても五藤が困るだけだろう なによりも 考えると気色悪いだけなので、槌也は黙って放っておいた。

出立の日 密かな企み

日和は上々。爽やかな風が快く、岡部の心も浮き立っていた。

土御門の領地は通称火の那と呼ばれている。皇都より南にあり、比較的暖かな所だ。

山が多く緑が深い。大地も肥沃で、比較的裕福な土地柄である。

山からは良質の木材がとれる。これらは川を利用して里まで下ろされる。海はないものの領地内から岩塩が取れる。

そこを有する土御門は、建国話に出てくるような古い家柄で、建国話を信じれば、土蜘蛛の子孫ということになる。

この地は妖の気配の濃い土地也。未来永劫、子々孫々まで、この地を守護し、人を守れ。されば人の心と姿を与えん 建国話に出てくる有名な一説である。

土御門の先祖が初代と交わしたという契約により、国替えも領地没収も免れている。

杜と呼ばれる代々の『お狩場』があり、その杜に入れるのは許しを得たものだけである。

土御門は六、七代おきに予備血統家、あるいは皇家の姫を貰うという、皇帝の憶えめでたき名門であった。

二年前、当主守繁死去の後、嫡男守之が当主となった。

守繁とは違い、清廉潔白。たとえ家臣から強く側室をすすめられても女を近づけない守之ではあるが、衆道しゅうどうの気はない。側室を持たないのは父の所業に頭を痛めたせいだ。

なにせ、村娘、武家娘、人妻と、美形であれば手当たり次第、相手のことも考えず手を出す人であったのだ。

一度など、祝言の決まっている娘に手を出し、祝言をぶち壊してしまった。娘は悲嘆のあまり自害したという。

守之が二十二になって一人身なのは、先代が回りのことに興味がなく、嫁取りの根回しをしなかったせいだ。

本来ならば、生まれたときから鵜の目鷹の目で相手を物色するのが普通だ。お家の存続が何よりも大事な武家ならば。

土御門ともなれば、つりあう家柄は少ない。そういう家は早くから相手を決めてしまう場合が多く、中々良縁に恵まれなかった。

その守之がやっと正室を持つとうというのだ。その姫君は予備血統家の姫、家臣一同が熱狂するのも無理はない。

守之のたった一人の舎弟を筆頭に、国許でも名門でその実直さを慕われている岡部孫兵衛おかへまへえなど、そうそうたる顔ぶれで皇都まで迎えにいくのであった。

皇都勤めの者をまわすほうが、日程が短くて澄むのだが、藩邸が手薄になるという理由から国許のものが選ばれた。中には一度も土御門の領地を出たことのないものもいる。

岡部もその一人であった。

荷物荷物の検分が続いているが、以前から用意させていたものだ。形式にすぎない。

「岡部殿」

「おお、これは柿崎様」

岡部は筆頭家老に頭を下げた。

「今日はまた、よい日和で、めでたき日にふさわしいのう」

「さよう。この岡部孫兵衛、大役を仰せつかり、光栄でございますれば、滅私の覚悟でやり遂げる所存」

岡部は当主となった守之を敬愛している。

守之は国許の急激な変化を好まず、まず筆頭家老との友好な関係を築くべく、国向きの事は任せて、今までのやり方を聞き取ることからはじめた。

そうして国許の実体を把握してから、改めるべき所は改め、変えるべきではないところはそのままにした。

気がつけば、いつの間にか掌握されていた。そんな風に国許も皇都の藩邸も我が物とした。

波風の立つ暇もない。見事な手腕だった。

まだ年は若い、賢君といえよう。

「なにより、なにより。予定に変更などありましたかな？」

「昨日、お伝えしたとおりにて。されど、天気具合もありますので、これから先かわるやもしれませぬ」

「岡部殿のこと、首尾よくやり遂げられると、信じておりますぞ」
ねぎらいの言葉をかけられ、岡部の胸が熱くなった。なにがなんでも、御正室となられる姫を迎えにいかねばと、使命感に燃えていた。

多忙の家老が帰った後、早川が報告に来た。

「槌也様が参られました」

「うむ、荷物の確認も終わったの。そろそろ刻限じゃ」

いつの世にも密かなる企み事とは存在するものだ。その根底には不満がある。様々に形を変え、強さにも差があるが、時にそれは人の道理を見誤らせる。

袖月は膝を折り、親とも主とも仰ぐ人の言葉を待った。
頭巾の向こうからくぐもった声がした。

「土御門守之は、水野の三の姫、夏との婚儀を決めた。これが何を意味するか分かるな、袖月」

「はい。土御門がより強く皇家と結ばれるということですよ」

「土御門の地盤がより強固になる。わしがそれを喜んでいると思うか」

「……いえ。由々しき事態と」

政情の混乱。それこそがこちらの付け入る隙となる。

「分かっておるなら、おまえはなぜわしの言いつけを聞かなかった？」

袖月は顔を上げた。言うべき事は言わなければならぬ。

御落胤によるお家騒動による混乱、それを招くために袖月は土御門槌也を仲間に引き入れる役を仰せつかった。むろん使うだけ使つて、頃合を見て切り捨てるつもりだったが、本人に会い、その案を

断念した。

「お恐れながら、天主様、かの者は味方にはできません！ あのよ
うな腐った者を引き入れては、騒ぎを起こすだけです」

「柚月よ。そなたわしに意見するか」

「びくつと柚月が体を振るわせた。」

「天主様」

「まあ、それは後でよい。今はこの婚姻を防ぐ」

「どのように……」

「水野家の夏姫はご恩情により、火の邦への物見遊山へ出かける」

「それは、土御門の領地へでございますか」

天主は頷いた。

「妻子は皇都に置くという御定法に真つ向から逆らった思い上がり
だが、皇帝の肝いりではな。しかし、それならばこちらもやりやす
い」

「水野の姫の御命を……」

柚月は息を飲んだ。相手は予備血統家のなかでも由緒正しき家
である。

「護衛には土御門からも人をやるそうじゃ。彼の土御門槌也もその
大役を任されておる。もし、姫にまさかの事あらば……」

「土御門槌也もただではすみません。兄弟の仲にも亀裂が……」

水野の夏姫に何事かあれば護衛にその咎がいく。命を落とせばも
ちろんのこと、怪我だけでも、最悪、死を賜ることになる。

そうでなくとも、何らかの罰は受ける。

そうなれば槌也も兄守之を恨むだろう。

「行列は今日出た。ここに戻ってくるには二十日はかかる。襲うは
帰り道、夏姫が加わってからじゃ。それまでに国許の方の細工を終
わらせておくがいい」

「はい。天主様」

出立の日 密かな企み（後書き）

ここから場所が変わるのでBL風味ラブコメとはしばしのお別れです。

くでも、新しいラブのないラブコメが……ラブじゃない……あれは義務感と忠心だからなあ……シリアスのつもりなんだけど……

皇都にて

一行は急ぎ足で一路皇都を目指した。姫君を待たせるわけにはいかないのです、やや強行軍である。

岡部はしきりと槌也を気にしていた。

当主のたった一人の弟ということで、行きは護衛対象ではあるのだが、本人が宿直さえつけさせない。

藩の威信をかけた行列ということで、自粛しているのか、噂のよくな乱暴狼藉は働かず、大人しいものだ。文句ひとつ言わず、黙々と歩いている。

最初は槌也のために駕籠か馬を用意させようとしていたのだが、本人が断った。

馬とは相性が悪い、とは本人の言だが、本当に城のどの馬も槌也に近づこうとはしなかった。一番大人しい馬でさえ、暴れて逃げようとした。

駕籠も、女ならともかく、自分のようなものを担いでいくのは担ぎ手が参ると、譲らない。確かに、立派な体格をしているから担ぎ手の負担にはなるだろう。

とにかく、自分は護衛だと譲らない。並みの藩士のように徒歩で帝都に行くという。

噂を頭から信じていたものは、首をひねる思いだ。

その日はやや遅めに宿に着いた。岡部孫兵衛は自ら槌也を部屋まで案内していた。

噂では、短気で、すぐ乱暴狼藉を働くという。いざという時は、我が身をかけて槌也をいさめるつもりであったのだ。

「このお部屋でございます」

「い苦勞」

槌也が短く礼をいい、部屋に入った。一日歩き尽くめで、さぞ機嫌が悪いだろうと思っていたが、そうでもないようだった。

今の所、槌也は強行軍にも文句ひとつ言わず、岡部の言うことをよく聞く。

「すぐに膳が参ります。今日はこちらでお召し上がりください」「分かった」

その時、ちようど宿の女中が膳を運んできた。障子にその影がうつっている。

「お膳を運んでまいりました」

「おお、ちようどよい、すぐに」

「待て！ 入るな！」

槌也が大声で静止した。

女中が障子を開けようとしたところで、凍り付いている。

すわ、何か機嫌を損ねたかと、槌也を振り返ると 掌で顔の下半分を被って、顔をしかめている。

「何事でございますか！」

「酒のにおいがする！」

「は？ お好きだと聞いたので、一本付けさせましたが、それが何か？」

「誰に聞いた！ そんなでまかせ！」

「でまかせ？ でございますか？」

「俺は下戸だ！」

岡部の脳裏は一瞬真っ白になった。下戸？ よりによって下戸？

「においだけでも、だめなんだ。せっかくの心遣いだが、下げさせくれ」

「これは、したり。それは申し訳ありません」

「知らなかったんだから、仕方ない。せっかくの酒だ、誰か酒好きのところへ持って行ってくれ」

「は、ではそのように」

結局、槌也は酒抜きの膳を採った。

岡部は無用の長物となった徳利を下げて部屋を下がりつつ首をひねった。

はて、噂とはずいぶん違うようだが？ と。
結局、行きでは槌也は噂の粗暴さを欠片もみせず、礼儀を守っていた。

多少の行き違いもあったものの、大きな問題もなく行列は予定より早めに皇都の藩邸についた。

藩邸に着くと、岡部が槌也に声をかけた。

「そういえば、槌也様は皇都で剣を学ばれたのでしたな」
「そうだ」

この岡部という男は、武を尊ぶらしい。道中もしきりと修行時代のことを聞きたがる。国許を離れたことのないものにとって、皇都の剣術界は憧れの的なのだ。

「皇都の有名どころといえば、柳庄流とか小角鬼神流などでございますな。槌也様のは蒲生流とか。柳庄流とも交流のある名門でございますな。そうそう、柳庄流といえば、嫡男の十兵衛殿が亡くなられたとか。お家の方は同母弟の三男が跡継ぎに選ばれたそうで」

いつの間にか情報を仕入れてきたらしい。いかにも残念そうな顔を
をする。

「もう三年になるそうです。天下一といわれた剣豪も病にはかてませぬなあ、まだお若いのに。お会いになったことなどございませぬか？ できれば一度、姿なりと拝見したかったです……」

「……………会ったことはある」

「それは、残念でございますな。時間があれば、線香のひとつも上げたいところではありますが」

「そうだな……………」

槌也は顔を背けた。気をつけないと、笑ってしまいそうだった。

「そうそう、久方ぶりの皇都でありましょう、会いたい方などございませぬか？ 出立まで多少時間がございしますが」

「いや、いい。大事の前だ」

久方ぶりの皇都。古馴染みに会ってみたい気もしたが、彼らが知

っているのは香月槌也「かづきつちや」であって、土御門槌也ではない。

それに、どうせ、本当に会いたい相手には会えはしないのだ。

(知ったら、拗ねるな。悪いが素通りさせてもらうぜ、剣鬼の旦那)
柳庄十兵衛という男は、死んだのだ。葬式も出した男に、まさか
会いに行くわけにもいかない。所在すら分らないのだ。

小角に聞きにいけば分かるだろうが、そこまでの時間はとれない。

「行こうか。お役目がある」

麗しの水野家の姫

「苦しゅうない。面をあげい」

促されるまま顔を上げ、槌也は息をのんだ。

夏姫は扇で隠すでもなく、面をさらしていたからだ。

通常、高貴な姫は人とは御簾越しか、直接対面するときでも扇などで顔を隠す。

にもかかわらず、夏姫は顔をさらし、槌也を凝視していた。

「土御門槌也にございます。此度は国許への護衛を仰せつかり、光栄にございます」

「そなたが、守之殿の弟御かの」

人形が喋っているようだ。と、槌也は思った。

水野家の三の姫、夏は齡十五と聞く。確かに高貴で、美しくも歳相応に愛らしい容姿だが、どこか硬質の作り物めいた様子だ。

夏は槌也の顔を大きな瞳で凝視している。むしろ槌也のほうが息苦しくなる。どうにも居心地が悪い。

十分に検分して気が済んだのか、夏が声をかけた。

「悪くない。妾の趣味からは外れるが、なかなか見られる顔よの」
何を言われたのか、一瞬、理解できなかった。ややあつて、品定めをされたのだと思ひ当たり、槌也は腰が抜けるかと思った。

お付の側近らしき女房がのけぞっているのが、視界の端にかかった。

(こつ、高貴な姫が、男の品定めなんか、すんなよっつ！)

何を考えているのかと、言葉には出さず槌也は考えた。

よいように考えれば、夏姫はまだ見ぬ良人の面影を、近い血筋の自分の上に見出そうとしているのだろう。

高貴の姫に結婚相手を選ぶ権利などない。家の都合、親の都合で嫁げと言われ、従うだけだ。相手の顔を知らないことのほうが多い。だとしたら、気の毒ではある。

兄、守之と自分はあまり似ていない。よくよく見れば、顔の作りは似てなくもないが、印象が違いすぎる。

兄守之はおっとりとした雰囲気がある。

違いを訂正すべきだろうか。

「この夏、天下のためとあらば、我とわが身を差し出すを厭いはせぬが、やはり相手は見目良いほうがよい」

(なんちゆう、言い草だ)

と、槌也は声に出さず心のうちで呟いた。確かに、土御門との婚姻は、計略結婚ではあるが、この言われ方では兄が気の毒になる。

しかし、なるべく好意的に解釈しようとしていた、その槌也の思いを打ち砕く言葉が、夏の紅唇より零れ落ちた。

「そなた、分かっていような。この夏は、北のご隠居の意を受けておる」

瞬間、槌也の全身が凍りついた。

まさかとの思いと、やりかねないとの思いが交差した。

「……意味が……わかりませぬ……北のご隠居の意とは？」

「ほう、分からぬか。それとも、分からぬ振りをしておるのかの？」

夏は優雅に扇で口元を覆った。

「……一向に」

全身にいやな汗をかいていた。体の震えを抑えられず、ぐっと拳を握った。

すうつと、夏の眼が細められた。

分かっておるぞ、とその眼が言っている。

「では、そういう事にしておこうかの。されど、覚えておくがよい。このことは守之殿も承知のうえじゃ。妾も天下のためとあらば、いつでも人の道を外れる覚悟がある」

おつきの女が取り乱して詰問する。

「ひつ、姫様、それはどういふ事でございますか！ 北張のご隠居様は、姫君に何をさせようとしているのでございますか！」

「戯れを」

腸が煮えくり返る思いを抑えつつ槌也はいった。

なんとしても、戯れにしまわなければならなかった。

暗に兄嫁との不義密通を示唆されているとは、認めたくはなかったのである。

北の隠居だけならともかく、兄嫁といい、まさか兄までが一枚噛んでいようとは！

（勝手に、人の道を外れる覚悟なんかするんじゃないやねえ！ 生娘のくせに、不義密通を唆すなよっ！ 俺の意思はどうなる！）

どこまでも道義心を大事にする槌也であった。

「では、戯れにしておこつかの。下がってよいぞ。妾は支度をしてまいる。道中、よろしく頼むぞえ」

槌也は答えず、ただ深く一礼した。

そうしなければ、罵倒の限りを尽くしてしまいそうだったのだ。

行列の支度をするために部屋を出た槌也は、庭木の枝を握り締め、心の中で罵倒した。

（恐るべし北血筋。あれで十五かよっつ！）

手の中で枝が砕けた。太い枝だったが、槌也の握力がそれを上回った。

槌也はもう一人の先祖帰りである小角猛流に思いを馳せた。

現在分かっている先祖帰りは自分と小角の跡継ぎだけである。

小角のほうは、ひと悶着あったが、すでに皇帝の姫の一人との婚儀が決まっている。

その皇帝の姫は、北のご隠居の孫娘なのである。

会ったことはないが、同じ北血筋なのだ。ああいう風に決まっている。

夏姫とその姫を重ね合わせ、槌也はまだ見ぬ同胞に同情した。

（ああいつのを、嫁にするってのも、災難だよな）

「槌也様、水野の姫様にご挨拶はすみましたかな」

岡部が声をかけた。

「すんだ。仕度が終わり次第こられる」

「どのような姫君でございましたか？」

期待に目を輝かせる家臣を落胆させることは、槌也にはできなかった。

「……美しい姫だ。さすが、北張血筋の予備血統家の姫というか……」

嘘は言っていない。

「さようでございますか」

嬉しそうな家臣にあえて水をさすようなことをするものではないかと槌也は思った。

どうせ分かるものには、すぐに分かるし、国勤めのものは三年たれば顔をあわせることも無くなるのだ。

槌也はあえて沈黙した。

麗しの水野家の姫（後書き）

やっとできました。水野夏姫でございます。なんか、とんでもないお姫様ですが、実はメビウスリング掲示板での掲載時、「気に入った」とのコメントをいただきました。

え、本当？と驚いたものです。も、もしかして彼女がこの作品のメインヒロインなのか！うーん……

表の姫 裏の姫

「姫様！ 先程の言葉は、何事でございますか！ 北のご隠居様は、姫に何をさせようというのですか！」

悲鳴のような詰問に、夏は足を止めた。忠実なる側近の顔を眺めて、得心言ったように呟いた。

「悪くない。楓、そなた中々の器量よの
「戯れを」

「戯れではない。楓、そなた御開祖様血筋の姫の役目を知っておるか？」

はっと楓は息を飲んだ。

「それは……各大名や譜代様との縁を結び、皇帝様の世を平らかにするという……」

「それは表向きよの。真の役割は、肌身をもつて、この世に災いを為すものを鎮めるが役割じゃ。初代様の姫を与えられしは、兵の妖つわものあやかしじゃ、知っておろう。この夏は、蜘蛛を任せられたのじゃ。このよ
うな大役、まこと誉よの」

「……肌身……災い……蜘蛛とは、土御門様のことでございますか？ そのような御伽噺はございますが……」

楓は混乱していた。夏姫の言葉の半分も理解できなかった。

「御伽噺が真実まことではおかしいか？」

「ひ、姫様……ご乱心を……」

「これ、楓、乱心ではない。覚えておくがよい。初代様は真に妖怪変化を人に変える神通力を持っておられたのじゃ。伝えられておる通り、大名や譜代の中には先祖が妖怪だったものが数多い。小角や土御門のようにそうと言い伝えておる者もあらば、忘れておる輩も多いのじゃ。我ら予備血統家の者すら伝えられておらぬ者もある。我が水野は古き家ゆえ伝えておるがの」

夏の瞳は熱を帯びていたが、乱心しているもののそれではなかつ

た。

「初代様の神通力とて代を重ねれば薄れてゆく。それを補うのが、我ら開祖様の血を引く姫よ。初代様の血を引くものは、その神通力を引き継ぐが、初代様のように思い通りに使えるわけではない。血肉に宿つておる。そこはそれ、人の血が入つておるからの。使おうと思えば、血肉を喰らわせるのか、あるいは情を通じるしかないのじゃ。妖に嫁ぎ、その血を押さえ込むが、我らが使命。世は大平というが、それを支えるは我らが女子よ」

楓は愕然とした。

「土御門はの、今？先祖帰り？がおる。先祖と同じく妖の力を持つものじゃ。それを鎮めなければならぬ」

楓はこの婚儀が決められた訳を知った。

「守之様のことで……ございますか」

「いや、槌也殿じゃ」

衝撃のあまり楓はよろめいた。

「今、先祖帰りは小角の若君と、土御門の槌也殿だけじゃ。小角の方は皇帝が息女、葉月様が任されておる。二人しかおらぬ先祖帰りを任せてくださるとは、皇家の姫君と同列にするは恐れ多いが、北のご隠居様はこの夏を高く買つてくださる。まこと光栄じゃの」

夏姫は喉をそらして笑った。

「姫様！ 姫様は守之様に嫁がれるのでございます！ 槌也殿は守之様の弟君ではございませぬか！ それでは あまりに」

守之と槌也、兄弟二人と通じるというのか、それでは人の道に反すると、楓は衝撃のあまり卒倒しそうになった。守之も承知のうえとは、あまりにも酷い。

（あんまりでございます。姫様に人の道を踏み外せとおっしゃるのですか、お怨みます、北のご隠居様！）

忠義者の楓にとっては、身悶えするほどの苦しみだった。

「では、楓ががんばってみるかえ？」

「姫様？」

「北のご隠居の策は二段備えじゃ。妾でなくば、楓じゃ」
「姫様、なにを」

「まあ、槌也殿も中々見目良いし、楓も藩主の舎弟の手つきとあらば、出世じゃ」

「なぜわたくしが！」

夏姫は笑いを止め、すつと扇で楓をさした。

「妾がそなたの生い立ちを、知らぬと思うてか、楓」
楓はよろめいた。

「長田の殿が、腰元に生ませた子であろう。御正室をはばかり、我が父が預かった。公には認められなくとも、そなたには予備血統家の血が流れておる。その勤め、努々忘れてはならぬぞえ」

楓は予備血統家の長田家の当主が腰元に手をつけて生ませた子である。生母の身分が高くなく、また女子であつたため、当主の子だと認められていない。

正室の勘気を恐れた長田の当主は、水野の当主に預けた。身分を認められていない楓は夏姫の側近に取り立てられ、それなりに身を立っていた。

「そなたのように、公には認められていないものも使い道があるものよ。北のご隠居のお力をもつてしても、妾とそなたの二人しか都合がつかぬ。妾に人の道を踏み外させたくなくば、槌也殿と契つてみせよ。一度でよいのじゃ。一度契れば、心までは妖怪変化にはならぬ」

へたりと楓が座り込んだ。

「……………ひ……………姫様」

「無理強いはせぬ。そなたが嫌とあらば妾がやるだけじゃ。妾はどこちらでもよい」

誇らしげに胸を張る夏姫は、機会があれば本当にやるだろう。初代より引き継いだ神通力を誇りにしている。こうと決めたらびくともしない、まさに北張血筋の夏姫を知り尽くしているだけに、楓は絶望した。

寄る辺のない自分を拾い上げてくれた、大恩ある水野の姫君に、そのようなことはさせられない。

「ひ、姫様にそのようなことは、させられませぬ。この楓、姫様のためならば、操も捨てましようほどに！」

涙をこぼしながら楓は訴えた。

「楓……そなたの忠義は嬉しいが、相手のあること故、それほどあらか様にするでない。槌也殿はどうやら道義を大事にするものものうじゃ。人ではないというのにの」

夏姫は喉を鳴らして笑った。

「三年弱、機会はそれだけじゃ。その間に契らねばならぬ。皇都に戻らねばならぬからの。妾も機会あれば当たる。どちらが先に槌也殿をその気にさせるか、競争じゃの。ゆっくりしておれる刻ときはない」
初代から受け継いだ神通力にかけて、役目を果たそうとする夏姫と、その夏姫を大事に思うが故に自らを犠牲にする覚悟を決めた楓。二人の女が勝手に自分の将来を決めようとしていることを槌也は毛ほども知らなかった。

この数刻後、水野家の夏姫とその側近　輿入れ後、夏姫について土御門に移る予定の家臣、女中など　と、土御門からの護衛は合流し、土御門の領地を目指して皇都を出た。

密かな攻防

この時代、実は街道を外れなければ宿に不自由はしない。大名は皇都に屋敷を賜り、そこに妻子を住まわせることになっている。その屋敷と国許を、数年おきに行き来しているため、街道は整備され、大名に野宿をさせなくてもよいように宿場が設けられている。

街道を行き来するのは大名だけではなく、品物も多く運ばれ、商人などが南へ北へと特産品を忙しく商いしてまわる。

大名は威勢を誇示するため国許から様々なものを取り寄せたりするし、皇都のものは各地方で重宝される。各地方の物産品が直接やり取りされることも多い。

海のない地方へは、海のある地方から塩や海で取れたものが運ばれ、山からは材木や、木を使った細工物が運ばれる。絹を作る地方もあれば、良質の鉄を精製する匠もいる。刀鍛冶がいれば、よい馬を生産する土地もある。暮らしてゆくのに必要なものをすべてひとつの土地から造るのは難しい。

塩の取れる海側では塩の所為で作物をやられることが多く、材木が取れる山では田畑を作る平らな土地がない。平地では作物の作物はよいが、塩や大量の材木が取れない。人の暮らしは持ちつ持たれつ、それを運ぶ商人は必要であり、それゆえに宿場に人が途絶えることはない。

夏姫御一行の行列がたどり着いたのは、皇都からそれほど離れていない宿場のひとつである。まだ陽のあるうちに入ったが、予定のうちだ。次の宿場へ足を伸ばせば到着は真夜中になってしまう。

余裕のある日程を組むならば、そこで泊りにしておいた方がいい。予備血統家の姫が宿泊するとなれば、もちろん貸切だ。そのほうが警備には都合が良い。予め先行して人をやり、何時ついてもよいように準備をさせておく。宿場でも高貴な人に何か間違いがあつてはと神経を尖らせている。

警備の重点は外へ向けられ、宿の中は比較的自由に行き来できるが、夏姫の回りには人がつけられしつかりと守っている。

護衛とはいえ、槌也も土御門の藩主の弟である。それなりの身分ということ、宿場での警備からは外された。実質の警護は他家臣が受け持ち、槌也はこの婚礼を土御門が重要視しているという象徴。つまりは飾りということだ。

槌也には身分を考えてか、広い部屋を一人で使うことになっていった。隨身は、最初は槌也にも宿直とのいをつけようとしていたのだが、槌也自身がやめさせた。護衛が護衛されるなど、聞いたことがないと頑強に反対したのだった。

結果、槌也の回りには気がなく、一人で休んでいた。

明日からのことも考え早めに就寝した槌也は、夜中にふと部屋の外に人の気配を感じて目が覚めた。

どれほど眠り込んでいても、何かあればすぐさま槌也は覚醒できる。そのまま身動きひとつせず、槌也は問いかけた。

「何かありましたか？ 楓殿」

障子の向こうで影が硬直した。

楓は夏姫の側近であり、夏姫の身の回りを世話するのが役目だ。

夏姫との最初の会見の場にも居合わせた。

夏姫とはまた違った楚々とした美女で、腰元の中では飛びぬけている。土御門からきた護衛のものの雑談にたびたび出てくる。

それほどの容色の持ち主だが、控えめでいかにも忠義一筋という感がある。

その楓が真夜中に夏姫の傍を離れ、男の寝所を訪ねるとは、ただ事ではない。ふつうなら色恋沙汰を連想するかもしれないが、その気がないのにおいで分かる。むしろ緊張しているようだ。

「……中に入っても、よろしゅうございますか？」

槌也は跳ね起きた。慌てて夜着の乱れを直すが、人に会う姿ではない。

「いや、夜着ですので……」

「……人に見られるのは……困ります」

楓の声は震えていた。それほど切羽詰ったことかと、槌也は礼儀に目をつぶる事にした。真夜中に男の寝所を訪ねたことが知れたら、あらぬ噂を立てられることになる。それを覚悟してもこなければならなかったということとは、よほどの事だ。

宿直のものではなく、わざわざ訪ねてくるということは、公に出来ないことなのか？

槌也は出来うる限り居住まいを正した。

「では、お入りください。夜着ですが、ご容赦を」

障子の向こうで楓が一礼し、障子を開けた。その姿を見て、槌也は腰を抜かしそうになった。

髪を下ろし肌着という、どう考えても夜伽に来たとしか思えない姿だった。

「な、なにごとですか！ その姿は！」

障子を閉めた楓が両手を揃えて頭を下げた。

「お情けをいただきとうございます」

「は？」

どう考えてもそちらの筋の展開だが、相手にその気がないのは明らかだった。

「はしたないことは重々

されど、わたくしにはこうするし

かっっ」

楓は恥らっていた。恥らってはいたが、情けを乞うのは本意ではないのは分かっていた。

「誰ぞに、何か言われましたか？ あなたがそのようなことをする必要はありません」

槌也には根拠無根の噂が多い。先立っても日々呑んでくれているという噂を信じたものが、機嫌を取るつもりか夕食に酒を出させた。しかし、実は槌也は 下戸である。

昔はよくからかわれたものだ。匂いだけで酔っ払いそうになるのだ。

慌てて下げさせたが、今度のそれも、誤解によるものだろうと思
った。

きつと楓が顔を上げた。すでに半泣きになっている。

「いいえ！ わたくしがこうするしかないのです。どうか、わたく
しを哀れと思うのなら、情けをかけてくださいませ」

ずいっと迫ってくる楓に、槌也は混乱した。

「か、楓殿」

思わず押し返そうとした手が止まった。それに気づいた槌也は一
瞬硬直し、引き寄せるように楓に顔を寄せた。

覚悟はしていたものの、思わず体を硬くした楓だったが、槌也は
それ以上何もせず、うつむいて唸った。

「北の隠居~~~~~」

顔を上げた槌也の形相が変わっていた。

「北張の隠居のお指図か？ わざわざ予備血統家の姫に女中の真似
事までさせて、騙まし討ちとは、恐れ入る。そこまでされるは、心
苦しいが、槌也にその気はござらん。お引取り願いましうや、姫
君」

怒りのあまり全身が震えるのを槌也は止められなかった。

迂闊にも、より血の気配の濃い夏姫に攪乱されていたが、こうし
て余人を介さず息がかかるほどの距離であれば疑いようもない。

楓 偽名でなければ楓姫か からはつきりと初代様の血の気
配がする。

（ここまでするかよ、北張の隠居！ 陰険すぎるぜ！）

兄嫁との密通が嫌ならば、こちらを相手にしろといわんばかりの
策だ。罪ではないが、人の心をはなから無視している。夏姫はとも
かく 本人があれだ 同情の余地はない このような無茶を
させられる楓がかわいそうだ。

「ち、違います。真似事では」

「では、その御開祖様の血の気配はなんだといわれる！ この槌也、
常人よりは鼻が利きますので」

槌也の剣幕に怯えた楓は必死に弁解した。

「み、認められておりませぬ。確かにわたくしは予備血統家の血をひいてはおりますが、母の身分低きゆえ、お殿様の子ではなく、母方の家の子として育てられました。その縁で同じ予備血統家にご奉公適いまして、姫様に仕えております。決して謀ってはおりませぬ」

思わぬ伏兵であった。いわゆる落胤という奴だ。槌也と同類らしい。槌也のように子と認められそれなりの身分を得るものもいるが、大半は少々の援助のほかは捨て置かれる。

楓もそうした一人らしい。

「お腹立ちはごもつとも。さぞかしお怒りかと存じます。されど、そこをまげてお願いいたします。どうか、お情けを」

「どうして、あなたがそこまで」

きつと楓が顔を上げた。

「大恩ある水野の姫様に、このような事はさせられませぬ！ ひ、姫様に罪を犯させたくなくば、わたくしがこうするしか」

「俺をなんだと思っていやがるっつー！」

さすがに槌也も頭にきた。水野の姫を相手にするのも御免だが、その気もないのに逼って来る女にその気になれというのは、もつと無理なのだ。槌也の嗅覚は、人の感情すら嗅ぎわかる。

泣きながら体を投げ出してくる美女に、恥をかかせるのは本意ではないが

「御免」

槌也は楓を振り切って部屋を出た。楓に非があるわけではないが、それだけではできなかった。

一人残された楓は呆然としていた。

「しくじったようじゃの」

涼やかな声とともに襖を開けて夏姫が現われた。

「姫様」

楓は居住まいを正した。

「一度で落とせなんだは、残念じゃ。これで警戒させてしまったからのう」

楓は深々と頭を下げた。

「も、申し訳ございません。わたくしが至らぬばかりに」

「まあよい。焦るでない。まだ時はある。楓は焦りすぎじゃ。昨日の今日で、もはや行動に移るとはのう」

十五とは思えない落ち着きをみせ、夏姫は笑った。

「槌也殿とて馬鹿とは思えぬ。己が妖力を抑える必要はわかるはずじゃ。ならば手は一つしかない。いつかどちらかの手をとらねばならぬ。その道理、知っていよう」

身を固めるには御開祖様の血を引くものと契らねばならない。しかし、土御門の杜を離れられない槌也にはその機会がないのだ。

その機会を作らんがために御乗法を捻じ曲げ、身近にその血を引くものを放り込んだのだ。その餌に食いついてもらわなければ困る。「姫様……」

夏姫は冷静に策を練り始めた。

「狙うのならば、行きか帰りよの。警備が手薄になるゆえ、領地内よりはやりやすかるう。まあ、守之殿の与力もあるゆえ、何とでもなるうがの。槌也殿は道義を尊ぶようじゃ、妾には手は出しにくいであろうな。楓はまだ不義にはならぬゆえ、妾よりはましであろう。後は槌也殿の覚悟よの。楓、そなたが確実とはいえぬゆえ、妾もあたるぞ。北張筋の予備血統家水野の名にかけて、なんの男おのこの一人や二人、契つてみせようぞ」

「そればかりは、おやめください、姫」

楓は泣きながら訴えた。夏姫が本当にやると骨の髄まで知っていたからである。

恐るべし北血筋。

ちなみに、長田家は南血筋である。

その頃、部屋から逃げ出した槌也は宿の屋根の上にあった。

警備のものに見咎められるわけにもいかず、かといって部屋に戻るわけにもいかない。

一番人の目が届かない場所といえば屋根の上である。屋根の上の人がいても気づきもしない警備のものを情けないといえはいえるが、今はそのほうがありがたい。

夜着でうろついている理由など言えないし、人様の部屋に乱入するわけにもいかない。人に見られれば何を邪推されるかわかったものではない。

ただでさえ悪い評判を、さらに落とすのは兄上に申し訳がない。そんな理由で槌也は隠れていた。

何の因果で男の自分が貞操の心配をしなければならないのか。

自分は呪われているに違いない。生まれ自体がすでにしっかり呪われているが、国許では自分に懸想する男色家と暮らし、外では兄嫁（予定）から言い寄られ、忠義に燃えた腰元から寝込みを襲われる。いったい俺が何をしたかと天に聞いてみたくなる。

夜の冷え込みは土御門領内より厳しく、夜着の槌也は震えた。

実は少々寒がりであるのだ。

翌日何事もなかったかのように顔をあわせた一同は、予定通りに宿場を離れた。

幸いにも槌也は風邪を免れていた。

その翌晩のことであった。

「槌也殿、槌也殿」

潜めた声が槌也の部屋でした。

そっと忍んできたのは、夏姫だった。

宿直までつけられているはずの夏姫が、どうやってこの場にいるのかというと、こっそり持ち込んだ薬包のおかげである。

頭から布団を被った槌也はびっくりともせず、夏姫ははっと、息を飲んだ。

寝息さえ聞こえない。

夏姫は一気に布団を剥ぐ。

「おのれ、空蝉うつせみ！」

そこにあつたのは、丸めて人形に見えるようにおいてある座布団だった。

「むづ、こつまでして妾を拒むとは、失礼な。妾のどこが不満だというのじゃ」

己が容姿に多少なりと自信のある姫にとっては、屈辱であった。

悔しげに唇を噛み、逃げられたと悟った夏姫は潔く槌也の部屋を後にした。

あちこち探すのは、さすがにまずい。宿直の交代の時間までに、部屋に戻らねばならなかった。

夏姫が去った後、部屋の押入れの戸が開いた。

「やっぱり、来たかよ。恐ろしい主従だ」

こんなこともあるつかと、押入れで寝ていたのである。

槌也は首をひねった。

「どうやって、宿直をごまかしてきたんだ、あの姫さん？」

夏姫には交代で、人が寝ずの番をすることになっている。部屋の前にも護衛のものが交代で警戒している。

ふらふらと抜け出せるわけがないのだ。

それが、夏姫が親切顔で振舞った茶の中に、そつと落とした薬のせいだとは知るはずもない槌也だった。

護衛に一服盛るとは、さすが北張筋の姫。

それから二日後の深夜のこと。

布団を剥いてみると、やはりそこに槌也はいなかった。

夏姫から聞かされていたとおりだ。

「どこにいかれたのでしょうか……」

楓は考えた。

槌也とて、深夜にあまり出歩く姿はみせられないはずである。どこかに隠れているとしか思えなかった。

部屋を見渡してみても、押入れが目についた。座布団を出しているのだから、人の入れる隙間くらいはある。楓は恐る恐る戸に手をかけ、ひきあけた。

検分してみても、そこに槌也はいなかった。

「どうでしょう……」

さすがに、宿の中を探して歩き回るわけにもいかない。

いつ土御門のものに見咎められるか。

楓とて、人に見られては困るのだ。

その頃、槌也は宿直にあてがわれていた無人の部屋で寝ていた。灯台下暗しという。

密かな攻防（後書き）

「おのれ、空蝉」が一番お気に入りのセリフだったりします。いやいや、いくら美人でもこういう性格の人にこういう理由でせまられてもうれしくもなんともないだろうな。榎也、こんな運命を用意した作者^{かみ}をうらんでくれてもいいぞ。

待ち伏せ 忍び寄るもの

土御門の領地は皇都より南にある。女足にあわせてゆるゆると歩みを進めていた。

駕籠に乗るのは夏姫一人で、それを囲むように腰元がつき、さらにその回りを護衛のものが固めて歩く。後ろからは荷物を積んだ馬や荷車が続く。

休み休みの行列で、それほど距離は稼げない。脚の弱い女中に強行軍などさせられないのだ。

鄙びたのどかな景色が続く。何事もなく、欠伸が出そうなのどかさだ。

それでも滅多に皇都、いや、屋敷から出ない女中達にとって、それは楽しみでもあるようだった。

鳥や花など些細なことで和やかに笑い声など立てている。

さすがに女中が多いと、華やかなものである。駕籠に乗る姫が退屈しないようにとの、配慮もあるのかもしれない。

和やかな雰囲気、表情を弛めていた槌也は、いきなり顔を引き締めた。

それは編み笠で誰にも悟られなかった。

先頭を歩く槌也は足を止め、行列を止める合図を送った。

一行は合図に従い歩みを止める。

槌也は天を仰ぎ、おいを嗅いだ。

「何事かの、槌也殿」

駕籠の中から夏姫が声をかけた。

槌也は駆け戻り駕籠の傍で跪いた。

「おかしな気配があります。探ってまいりますので、少々お待ちください」

「さようか。ならば待とう。人手はいるかえ？」

「いえ、わたくし一人で十分。では」

短く礼をして、槌也は先へ駆け出した。

その姿が瞬く間に消え、水野から付いてきた女房が不安そうに囁き交わした。

「何事でしょう？」

「行列を止めるなど……」

「まあ、怖い事であればよいのですけど」

実は槌也は水野の家臣に評判がよくない。

それなりの美丈夫ではあるものの、野趣の強さと、僧でもないのに結えないほどに短く切られた髪のせいである。

他は体裁を整えてはいるものの、それだけで由緒正しき水野家のご家来衆には奇抜なのだ。

地元での噂を耳にしたものもいる。

おかげで槌也に対する水野家の家臣の態度は 一部を除き

もちろん夏姫と楓だ 腫れ物に触るようなものだ。

槌也につけられた補佐役 実質上の警備責任者の初老の男が、駕籠の脇でひざをつき、夏姫に詫びた。

「申し訳ございません。行列を止めるなど……槌也様は何をお考えなのか……」

「心配ない。ああ見えても槌也殿は鼻が利くのじゃ。何事か嗅ぎつけたのであろうよ。ゆるりと休むがよいぞ」

夏姫は泰然としていた。

槌也は一人行列が見えなくなるほど先へ駆け抜けた。途中曲がり角があるためすぐ見えなくなったが、もし誰かがその速さを見ていたら眼を剥いただろう。人の脚に適う速さではない。

槌也が足を止めたのは、一行が通る予定の道の中で、片側を崖、もう片側には茂みや林などの遮蔽物の多い人気のない道だった。

「おい」

槌也は藪の辺りに声をかけた。

「そこに隠れている奴等、今からここを水野家姫君の御一行が通る

と知つてのことか？」

答えはない。しかし、槌也は続けた。

「そんなに殺気を出してちゃあ、一里先からでも分かるぜ。俺は鼻が利くんだ」

答えはない。しかし、藪に潜む者の殺気が膨れ上がった。槌也は目を細めた。

「殺るや気かい？ 面白いが、俺は、人間は相手にしねえんだよ。隠れているんなら、通り過ぎるまでそのまま置いてくれや」

槌也が何かを撒くように手を振った。その瞬間、臭いが動いた。

「へえ、避けるかい。視えるのか？ まあ、いい、一人ぐらい動いても、他の奴はどうか？ 動けねえだろ？ 見殺しにするか？」

槌也は姿の見えない相手に向かって続けた。

「出てくるなよ？ 何もしなけりや、こっちは見逃してやる。仲間も、後で動けるようにしてやるさ」

藪の中の殺気が消えた。

「そうそう。いい子だ。林の中の仲間にも言っておきな。弓なんぞ置いとけてな。金物の臭いがするぜ。さすがに鉄砲はないようだが、姫にもしものことがあつたら、皆殺しにしてやるぜ」

言っただけ言つと、槌也は踵を返して駆け戻った。

さほど時を置かずして駆け戻ってきた槌也に、夏姫は駕籠の中から声をかけた。

「事は収まつたかの」

「は、何事もなく通れまする。ご出立を」

「大儀であつた。こちらとしても、よい休憩よの」

槌也は合図を送って行列を出発させた。理由もあきらかにしない行為に不満のあるものもないではなかったが、肝心の夏姫が劣いの言葉までかけるようでは文句のつけようがない。

一行は何事もなかったかのように歩を進めた。

一方 槌也が駆け戻る姿を藪の中から見送った柚月は震えてい

た。

柚月の霊眼は、槌也が細い細い糸のような霊気を撒き散らしたのを確かに見た。

とっさにそれを避けられたのは僥倖だったが、それさえも相手に知られていた。

霊気の糸に触れた仲間硬直している。お狩場であったとき、単なるろくでなしにしか見えなかった土御門槌也だが、あそこに結界を張った張本人だったのだ。

皇都で剣を学んだということは聞いている。由緒ある流派の、免許皆伝を十五までに実力で勝ち取った腕前だと　しかし土御門槌也が妙な能力の持ち主だとは聞いていなかった。

情報に手抜かりがあったようだ。

柚月は言いようのない恐怖に襲われ、全身に汗をかいた。

「……何者なの、あいつ……得体がしれない……敵に回すのは……怖い……」

数刻後、水野家姫君の御一行は何事もなかったかのようにその場所に差し掛かった。

行列が通り過ぎようとすると、槌也は列を先に行かせ、自分は最後尾に位置した。

それと目が合ったように気がして、柚月は全身に汗をかいた。

弓の隊には事体を知らせ、攻撃を控えさせてはいるが、槌也は万が一を考えて威嚇しているのに違いない。

妙な術にかかった仲間は硬直し、動かすこともかなわない。ここを襲われたら、少なくとも金縛りの仲間は全滅だ。いざとなれば、見殺しにするしかない。

槌也が足を止め一行の姿が見えなくなるまで柚月のいる辺りを凝視していた。

見えているのかと柚月が戦慄すると、ふっと槌也の口元が緩み、軽く何かを引くような仕種をした。すると、糸のような霊気が仲間

の体からはなれ槌也の手元に戻っていくのが視えた。

不自然な体勢で固まっていた仲間が力尽きたようにくず折れて、
袖月は駆け寄った。

命に別状はないようだが、全員息を切らせている。

仲間を抱えた袖月の耳に、槌也の声が響いた。

「見逃すのは一度だけだ。俺は人間とは戦いたくないが、立場つて
ものがあるんでね。水野の姫に手を出したら、次は斬るぜ？」

それだけ言うと槌也は一行を追いかけて走っていった。

「あいつは一体、なんなの……」

袖月にとつて土御門槌也は捨てては置けない存在となった。

天主様の言うとおり 仲間に引き込むか あるいは 始末
しなければならぬ存在として

その日、土御門を目指す夏姫の一行は何事もなくその日の宿にた
どり着いた。

予定通りの実に順調な旅であった。

待ち伏せ 忍び寄るもの（後書き）

よかったあ。柚月の再登場です。作者としてはこの子がヒロインのつもりだったりします。

敵方の男装ヒロインというのは作者のロマンだったりします。しかし、あの夏姫や楓さんに張り合えていますでしょうか？
それが心配です。

蜘蛛草子 土御門の業

その日の宿舎は宿の都合で二棟に分かれていた。ここでもそうだが、どうやら部屋割りを決める役目の者は、できうる限り槌也と夏姫の部屋を離しておきたいらしい。

深夜、ときおり槌也が姿を消すことが数度あり、いらぬ用心をしているらしい。

槌也にとつてもそのほうがありがたい。

一度ならず、人には言えない攻防があつたのである。

ふと、部屋においてあつた草子の、表紙に書かれた蜘蛛の絵が目にとまり、槌也はそれを手にとつて見た。

泊り客の無聊を慰める読み物だろう。中身は、国創りの物語のうち、土蜘蛛の段のようだ。

人気のある話である。

この話の筋は、御開祖様の英雄譚のうち土蜘蛛を相手にしたものだ。

この段では、珍しく、戦うのは御開祖様ではない。何かの理由があつて 諸説あるが、ここでは省く 御開祖様の到着が遅れ、代わりに表立つて戦うのは配下である小角おつのたけのぶ猛宣である。

名前から分かるとおり、小角の先祖である。もちろん、この男、只者ではない。御開祖様に敗北し その段はその段で、二目と見られないおぞましい姿の化け物が、御開祖様の血を与えられ美丈夫と変化する場面が見せ場で、かなり人気がある 神通力によって人の姿形と心を与えられてはいるが、その本性は人喰いの鬼である。知略によって、相手の妖力を奪っていくのが常套手段の御開祖様と違い、この戦いは二大妖怪の真つ向勝負と相成る。

徐々に相手が弱くなっていく他の段では味わえない派手な戦いが魅力だ。

並の人間ならそれだけで切り刻める妖系を、鬼の強力で引き千切

る小角。土蜘蛛が妖糸でもって空中を自在に動けば、小角もまた風に乗る。

多くの物語では、最後は妖怪が降参し家来となり、人の姿と心をもたらすのだが、土蜘蛛は最後まで降服せず、とうとう小角に討ち取られてしまう。

幾度も降服を勧められるのだが、土蜘蛛は小角を強敵と認め全力を持って戦う事を喜びとし、満足感の中に力尽きる。

降服するのはその妻たる雌の土蜘蛛だ。宿した子を守るため御開祖様の配下となる。

雌蜘蛛は人の心と姿を与えられ、そして、もともと縄張りとしていた土地を守護する任を仰せつかる。

雌の名は伝えられてはいないが、これが土御門の先祖である。

戦いの歡びに溺れ、身を滅ばすというのは、なにやら身につまされるものがある。槌也にもその傾向がないでもない。

(業ってやつかね)

槌也は頁を開いたまましばし身動きもしなかった。

「さすがに、感じるものがあるみたいだね」

槌也は視線だけをその声の主に向けた。

「いくら戦に負けたからって、後々までも妖怪扱い。ご先祖様をそこまで貶められて、何も思わないはずないよね」

「(辱めるもなにも)」

声の主は以前杜に入り込んでいた女だった。

「幕府はこのままずっと、あんた達のご先祖様を妖怪呼ばわりするよ。いいのかい？ 良くないよね。その証拠にさつきから、一枚も先に進んでない」

「俺は字、読むのが遅いんだよ」

槌也は女に草子をほうった。女は無意識に受け止める。

「読んでくれねえか？ 好きな話なんだ」

女が硬直した。

「これを部屋に置いといたのは、おめえだろ。匂いがするぜ。つい

でに名前も聞いておこうか？ 俺は人間相手に殺し合いをする気はねえが、謀反を企む奴をそうそう見逃しちゃあ、立場上悪いんでね」「絶句していた女は苦笑いを浮かべた。

「……お見通し……というわけ？」

槌也はにいつ、と笑った。

「俺は鼻が利くんだよ」

「……人を呼ばないの？」

いくら回りに人気がなくとも、一声かければ駆けつけてくる警護の者がいるはずである。それも呼ばず槌也は平然としている。

「呼ぶ必要がどこにある？ おまえに俺は殺せねえ」

「いつでも捕まえられるってわけ」

「そういうことだ。行列の通る道を知っていたわけとか、俺がこちらの部屋を使うことを誰に聞いたのかとか、知りたいことは山ほどあるが、まず聞いておこうか 名前は？」

女は顔をひずめ、

「袖月」

と答えた。

「やっと名前が分かったな で、わざわざ俺の前に現われたのはなぜだ？」

「話を聞く気はあるの？」

「陣中にもぐりこんで来たんだ。聞いてやらなきゃ失礼だろうぜ」
袖月が気を取り直したようにきつと顔を上げ話し始めた。

「わたしは、天主様の使い。あなたを仲間になるように説得しに来たのよ」

「天主だあ？」

槌也は顔をしかめた。

天の主とは、いかにも思い上がった名前である。そんな名を使う時点ですでに皇帝の怒りに触れる。野放しにされているわけがないのだが

「そう。天主様はこの乱れた世を嘆き、世直しをするため天から降

りられたお方」

槌也は早くも後悔し始めた。どう聞いても誇大妄想の大風呂敷にしか聞こえなかったからである。

「今の世は、大昔に決められた身分に縛られている。初代とも御開祖とも呼ばれる皇帝の先祖が決めた身分だけで、その能力もないものが大手を振って天下に号令をかけている。そのため、あらゆる横暴がはびこり、下々のものは無体な真似に耐え忍んでいる。それがいいことではないのは分かるでしょう。人は解放されなければならぬのよ」

知らないとは恐ろしい。槌也はこっさり心の内で呟いた。

「開放ねえ」

「そう。皇家という偽りの天からの使者ではなく、天主様のもと、自由で公平な世の中にしなければならぬのよ」

「……………」

皇帝、皇家、予備血統家、それらがなくなったらどういう世が来るのか、知りすぎるほどに知っている槌也には、戯けたことしか聞こえなかった。唯一妖を抑えられるものがなくなった世は、恐ろしいものになる。

自由も公平もなにもない。

「あなたも、先代の子という身分に縛られている。同じ子供でありながら先に生まれたというだけで、兄は藩主、あなたは部屋住みという身に甘んじている。不公平だとは思わないの？」

「そうやって、不満を煽り立てるのが手かい？ 悪いが、もう十分だ」

槌也は袖月の演説をさえぎった。

「矛盾してるぜ。この世の不条理を訴えながら 俺の身分を利用しようって腹が透けて見えるぜ 今の身分制度にどっぷりつかってる俺が、それをぶち壊す話にのりとも思っているのか？ 不満を煽り立てて、自分達の笛で踊らせようって寸法だろうが。それじゃあ、騙されてやれねえよ」

柚月の眉がつりあがった。

「今の世の何が不満だ？ 俺にはけっこううまくやっていると思っ
がね。完全じゃあないが、そこはそれ、どんな仕組みにも抜かりが
あるさ。大事なのは、人と人がうまく付き合っていくこと、人のこ
とも考えるってことだろう。それがあればうまくいくさ」

「それは、あなたが下々のものを知らないからよ！」

「おいおい、俺がどこで育ったのか、知らないのか？」

柚月がぐっとつまった。

落胤である槌也は伯父の子として育てられている。伯父の身分は
下級武士で、町民とたいして違わない。次男として育てられた槌也
は早くから皇都に修行にやられ、街中で暮らしていた。柚月の言う
所の下々の暮らしにどっぷりとつかっていたのだ。

「俺のこと、どう聞いてるんだ」

柚月は鼻を鳴らした。もはや軽蔑を隠す必要もない。

「前のお殿様が狩の帰りに武家の娘に手を出して生ませた御落胤。
腹違いの領主様が病弱なのをいいことに、お役目を代行するとい
いながら、お狩場に入り浸って、気に入りのお稚児さんと狩小屋で暮
らしてる。家老たちに国向きことはまかせつきり。贅沢し放題、
好き勝手やってる、ろくでなし。奇矯な形をして、粗暴で乱暴狼藉
し放題、血を好むって聞いたわ」

槌也の頬が微妙に歪んだ。

「血を好む……ねえ」

言いて妙つ、と槌也は苦笑した。血を好むのは事実ではある。

ただし見るのがではなく口にするものとして。

乱暴なことをするという意味のつもりだろうが、当たらずとも遠
からずというところだろう。

「で？ 自分の目で見てどうだ？」

「そのままでしょう」

「ひとつ訂正してくれや」

「なにを？」

「俺に男色の気はねえ」

それだけは譲れない槌也であった。

目を白黒させている袖月に、槌也はふきだした。ひとしきり笑った後、長年自分の中で鬱積していたものを吐き出した。

「俺ア、自分が先代の落胤だとは、十五までは知らなかったんだよ」
槌也は溜息をついた。

「そもそも、手がついたのは一回きりだったらしいからな、先代もそれで子が出来るとは思わなかったし、おふくろも、もう嫡男もおられる中に、落胤騒ぎなんぞ起こしたくなかったらしくて、誰の子か言わなかったんだ。それで伯父貴の二人目の子として育てられたんだ。俺あ、自分が普通じゃねえって、薄々感づいてはいたんだけどよ、隠してたし、まさか先祖の業を背負ってるとは思わなかった。部屋住みの次男坊だが、腕が有りそうだったんでそれで身を立てるって、箔付けのため皇都に留学に行かされた。それが運のつきって奴かね、騒動起こして、どう考えても土御門の血筋だってんで調べて、先代の御落胤って分かったんだよ。おふくろも観念して洗いざらい打ち明けたし、先代もそういえばそんなこともあったなあっておぼろげながら思い出したしな。それで土御門に引き取られたってわけだ。ひでえ話だろ」

最初、槌也の生母は父親が誰か、頑として白状しなかった。

そのため父無し子を生むのは世間体が悪いと、子が生まれた後、遠方に嫁がされ、子供は長兄の次男として育てられた。

槌也という名は生母がつけたものだが、？つち？の音を名に入れたのは、母なりのこだわりであったのだろうか。？つちなり？と。

嫁いだ先で一男一女をもうけたらしい。槌也の異父弟妹になるが、槌也は会ったことはない。

事があきらかになった後も、できればこのままそつとしておいて欲しいと、側室の話を断り、嫁ぎ先で暮らしている。

情のこわい人らしい。

伯父 義父は堅苦しい人ではあったが、真面目な人で、槌也は

伯父が父親だと、疑いもしなかった。

子供のころから槌也は自分が他人と違うことを自覚していた。とにかく丈夫で、めったに怪我もしなかった。

自分でも異常だと自覚していたのは、血を見ると美味そうだと思ってしまうことと、力の強さである。槌也はそれをひた隠しに隠していた。

剣を教えられたのは、武士として当たり前だが、槌也には天賦の才があると最初に師事した師匠に言われ、その紹介で皇都の名門道場での住み込み弟子となったのだ。

この時の師匠に柳庄流との付き合いがなければ、槌也の生涯はまた別のものになっていただろう。

伯父としては、いずれ道場のひとつも持たせてやるつもりだったのだろう。皇都で剣を学んだといえば、地方では評判になる。

何事もなければ、あるいはそういう人生を送っていたかもしれない。

その頃の自分はといえば、鬼成の後ろを付いて回るがきだった。天下一の呼び声も高い男に憧れていたのだ。

鬼成は鬼成で、自分を気に入っていたらしく弟分扱いしてくれた。鬼成には異母弟、同母弟、それぞれ一人ずついるが、槌也ほど剣術に身を入れているわけではなく、鬼成はそれが寂しかったようだ。とはいえ、二人が剣術嫌いというわけではない。剣術指南役の息子として精進はしている。鬼成が跳びぬけていたのだ。

皇都での騒ぎの原因は、かの鬼成十衛である。当時別の名を名乗っていたこの男、どうあっても小角の門弟と勝負がしたいと実力行使に出た。

小角の門前に張り込み、出入りする者のなかから相手を物色した。小角の一族は大柄で美形が多い。皆が武術の心得があるようで身のこなしがすでに只者ではない。

小角は影で汚れ仕事　つまりは密偵や暗殺　を請け負っているという噂があったが、まんざらただの噂ではないかもしれない。

思ったものである。

その中で鬼成が惚れ込んだとも言って良いほど気に入ったのが、かの五藤十五である。小角には大柄なものが多いが、そのなかでも飛びぬけた体躯の持ち主であったが、それだけではない何かを感じ取ったのだ。

そのときは知らなかったが、五藤は鬼神流のなかでも千騎せんきとともに双壁と謳われている男である。

槌つち也はこの鬼成につきそい門前の張り込みや、尾行まで付き合っ

た。
ある意味、剣の道を志すものとして、小角に興味があつたのも事実だが、やはり鬼成を兄のように慕っていたからである。

蜘蛛草子 土御門の業（後書き）

やっとシリアスっぽくなりました。作者としてはここからが見せ所なのでほっとしています。

わたくし、コメディ苦手なので。

覚醒 妖の血族

それは月の美しい夜のこと。とうとう鬼成は行動に出た。
五藤十五は同僚である千騎ちしき桜春と共に藩邸を下がって帰る途中で
あった。

もとより人通りのない道であった。しんと静まり返るなか、月明かりにてらされ歩く、凜々しい男前である五藤と、どちらかといえは女のように美しい顔をした千騎は対のように見えた。

五藤の家に向かう道に、開けた場所がある。予め尾行してそれを知っていた鬼成は槌也を伴い、二人の前に立ちふさがった。

「小角の御家中のものですな」

「？ そちらは？」

尋ねたのは千騎のほうだった。

ここで鬼成は本名を名乗った。さすがに小角にも知れ渡っているようで、千騎が眉をひそめた。

「後ろの方は？」

「見物人だ。気にするな。後学のため、見たいとよ」

千騎が苦笑した。

「柳庄流のご嫡男でしたな……まさか、闇討ちでもあるまいに、このような所でなにようでしょう？」

「闇討ちではござらん。闇討ちならば、声をかけずに後ろから切りかかるう」

にいつと笑った鬼成に、千騎も笑った。

「違うない」

「野試合を所望いたす。いざ、尋常に勝負」

鬼成の視線から、勝負を望むのは自分ではなく五藤のほうと知り、千騎は肩をすくめた。

「ご氏名だぞ、五藤」

どこか面白がっている千騎とは違い、五藤は困ったような顔をし

ていた。

「残念ですが、他流試合は禁じられております。わが方のしきたりにて、ご容赦を」

「お聞きの通りだ。それに、このようなまねをすれば柳庄流にも傷が付きましよう。お引取りを」

軽くあしらおうとした千騎に、むしろ胸を張って鬼成は答えたものだ。

「なんの、柳庄流には傷はつかん。拙者、予め親父殿に勘当されてまいった。もはや柳庄とは無関係と思われたし。なにが何でもこの勝負、受けていただく」

二人の小角は目を見張った。

「……………そこまでされるか……………噂には聞いたが……………なんとまあ」

千騎が呆れたように言うのも無理はない。柳庄流といえば、皇帝の実質唯一の指南役。その嫡男ともなればゆくゆくは父の後を継ぎ指南役になるはずだ。腕が伴わないのならともかく、押しも押されもせぬ天下一の武者でありながら、それを投げ捨てるとは。

そういう男であるからこそ、槌也は惹かれていた。

「名誉にも名声にも興味はござらん。我が知りたいはただひとつ、我がどれほどの者かということのみ」

鬼成が白刃を抜いた。剣を向けるのは五藤のみ。

「いざ！」

鬼成の鋭い切り込みに、五藤は剣を抜いて受けた。白刃と白刃が打ち合う鋭い音とともに、二人が飛びのいた。

喜悦を浮かべた鬼成と驚愕に目を見張った五藤が、対峙していた。鬼成の剣気に、抜かされたのだ。これではもはや勝負を拒むことはできない。

「五藤」

舌打ちをして、割って入ろうとした千騎に槌也は斬りつけた

千騎は鮮やかにかわしたが、軽く目を見張った。

「勝負の邪魔はさせん」

ふつと千騎の唇が綻んだ。あまりにも艶やかな笑みに、槌也は一瞬気を飲まれた。

「蒲生流か　その太刀筋は。蒲生流の門弟がなにようかな？　柳庄の隠し子でもあるまいに」

一度太刀筋を見ただけで流派を言い当てるとは、千騎という男も只者ではなかった。

千騎の戯言は槌也の気を奮い立たせた。

「戯言を！　これなるは香月槌也。故あって与力いたす」

槌也は二度三度と斬りつけたが、千騎は刀を抜きもせず、飛燕のごとき身ごなしのみでかわし続けた。

抜くまでもない相手、ということだ。

「その歳でそこまで使うとは、たいしたものよ。筋がいい。が、俺の相手は、十年早い」

このときには鬼成の援護という考え方はすでに忘れていた。目の前の男にせめて剣を使わせるくらいはしたいとむきになっていた。それほどに力の差があった。

その間、鬼成と五藤は切り結んでいた。千騎は舌打ちをして

「おい、五藤。いつまで」
同僚を振り返った千騎は、その腕にかすかに流れる血に眼を剥いた。

微かに避け損ねた剣先が、浅い傷をつけたに過ぎないが、それはあつてはならないことだった。

五藤の能力は、矢も刀も通さぬ？金剛身こんごうしん？というものだからだ。それを貫き傷つけられるものは？鬼をも斬る剣？だけだ。

「馬鹿な！」

驚愕のあまり棒立ちになった千騎に槌也は突っ込んでいた。

回りまで気を配る余裕がないための、無我夢中の突きだったが、すでに千騎にかわす余裕はなかった。

そして槌也の体は千騎の体を突き抜けた　？神出鬼没？あらゆる物を通り抜けられるのが、千騎桜春の鬼としての能力だった。

「しまった！」

千騎の叫びは己が力を不用意に使ったためではなく、互いの体が重なった刹那、千騎の中の鬼の力と、槌也の中に眠っていたものが呼応したためである。

「こやつ、？先祖帰り？か！」

「があああああ！」

槌也の中の土蜘蛛の性が、体を一気に妖化させ始めた。

脇腹から人にはない第二、第三対の腕が生え出し、瞳を赤く染めた。

千騎の叫びと、槌也の絶叫に五藤と鬼成も手を止めていた。

「槌也！」

鬼成は弟分の変化に愕然としていた。

それは人ではなく、もちろん蜘蛛でもない。人ほどの大きさの蜘蛛がいるわけがない。人と蜘蛛を混ぜ合わせたような、奇怪なものに変化しつつあった。

三対の腕　人のそれと蜘蛛の脚、それを持つ　が苦しげに振り回された。

顔にはまだ人の面影が残っているが、黝い剛毛あおくろが侵食している。口からは牙が生え、悲鳴とも雄叫びともつかぬ絶叫をあげている。鬼の末である小角には、それがなんなのか分かった。

「……土蜘蛛……土御門の縁者か！　やっかいな！」
五藤は舌打ちした。

土蜘蛛は、実力で言えば鬼に次いで第二位の実力を持つ妖怪だ。小角といえどもたやすく倒せる相手ではない。

また、血族の少ない土御門を相手にする事に躊躇もある。下手をしたら、血筋を絶やしてしまう恐れもある。

実を言えば、槌也はこの後のことはあまり覚えていない。体の奥から湧き上がった衝動に支配され、半ば正気を失っていたからだ。

「槌也……なのか……これが……」

呆然と呟く鬼成に

「危ない！」

千騎が腕を突っ込んだ。千騎の腕は鬼成の胸元を通過して 千騎と鬼成の体が同化した 二人の体を槌也の腕がすり抜けて立ち木をへし折った。

千騎の力は同化した状態ならば、その同化したものまで物をすり抜けさせる。

そうして鬼成の命を救った千騎は、鬼成を背にかばいながら叫んだ。

「下がっている！ 人間の出る幕ではない」

「なんだ、あれは！ 槌也はどうなったんだ！ きさま、今なにをした！」

さすがに鬼成も気が動転していた。

続けざまの怪異 槌也が化け物の姿になり 自分の胸から人の手が飛び出し 自分の体を物が通り抜けていったのだ これ で動転しない人間はいない。

千騎は人ではないが、今は説明どころではない。

「説明している暇はない！」

余裕も消し飛んだ真剣な顔で千騎も刃を抜く。五藤はすでに槌也に対峙していた。

「槌也……」

変わり果て奇怪な叫び声をあげる弟分の姿を、悲しげな目で見た鬼成は、きつと顔を上げ、白刃を槌也に向けた。

「下がっていると云ったはずだ！」

「そうはいかん！ 俺の責任だ！」

鬼成は千騎に怒鳴り返した。

妖化の衝撃で正気を飛ばした槌也が、動くものに対して、攻撃を仕掛けた。剣技も何もない、無駄の多い滅茶苦茶な動きだ。だが、速さが尋常ではない。

鬼成は間一髪これかわし、五藤と千騎は同じく尋常ではない速さでかわした。

小角もまた人にあらず。

鬼神流は人以外のものを斬るためにある剣だ。飛燕のごとき速さで斬りかかる。

この後、槌也は衝動に任せて暴れたらしい。わずかな記憶の断片があるだけだが、槌也は戦いを楽しんでたという覚えがある。

複数の腕の攻撃をかわし、最後に鬼成が懐に飛び込んで副腕を二本落とした。しかし、相打ちで、鬼成も左の腕を失った。

その痛みで一瞬正気に返った槌也の口に、一縷の望みをかけて五藤が傷ついた腕を押し付けた。

血のにおいに、反射的に槌也はそれを啜った。それが効して、不完全な妖化であったため、槌也の体は人身に戻りだしたが、傷が大きいがため命を守ろうとする本能が、完全な人形に戻るのを拒絶していた。

六本腕の中途半端な姿で、痛みと、わが身に起こったことへの衝撃で朦朧としていると、いささか惘然とした千騎が斬りおとされた腕を持って槌也に近づいた。

「俺のせいらしいからな」

千騎が槌也の傷口に腕をあわせた。

一瞬、槌也の腕の傷口と千騎の手が融合し、再び千騎が手を離すと腕は繋がっていた。痛みはすでに消えていた。

千騎の力はこういうふうにも使える。

命の危険が去った槌也の肉体は副腕を収め人の姿に戻った。全身を襲う疲労さえなければ、幻と思えるだろう。

千騎は鬼成の腕も拾い

「これはおまけだ」

千騎は鬼成にも同じように腕を繋げた。人にもそれは有効らしい。おかげで鬼成は隻腕にならずにすんだ。

「おお？」

鬼成は驚いたように、二度三度と腕を動かしていた。

仕事を終えた千騎の顔は青ざめていた。

槌也の中で起きていたことが、千騎の中でも起きていたのである。ただ、千騎は自分が何者かを知っていた。それに？先祖帰り？でもない。

槌也のように無防備に己の妖力に飲み込まれたりはいしない。

五藤が傷ついた腕を千騎に近づけた。

「大丈夫だとは思うが、飲んでおけ」

千騎は逆らわずにその血を啜った。

口を離れた千騎がその傷に触れ

「世話をかけたな」

ぶつきら棒に千騎が言うと、五藤は律儀に返答した。

「いや、俺のせいだからな」

五藤と千騎の手が一瞬同化して、撫でるように千騎の手が動いた。放すと傷は奇麗に消えていた。

それだけを見届けて、槌也は失神した。

覚醒 妖の血族（後書き）

バトルです。アクションです。なんかほっとします。ここにいるあの人はもちろん、あの話に出てきたあの人です。名前が出てこなくても誰のことだかわかりますね。

追憶 宿命

その後は大変だった。

槌也と鬼成は小角の屋敷に運び込まれ、留め置かれた。

事が外に漏れないようにとの、配慮であった。

半ば呆然としているうちに事態は流れていた。槌也の身元調査と、剣鬼たる鬼成の処遇について、回りが右往左往した。

槌也の身元については簡単だったらしい。最初から土御門の血筋なのは確実なため、香月の家への聞き取り調査と、そのときはまだ現役であった先代への詰問。

他家へ嫁がされていた生母の告白ですぐにあきらまになった。

鬼成の方がまだ大変だった。

小角の秘密にかかわり、記憶の差し替えも聞かない特殊体質だったのだ。

口をふさぐことが出来なくてもないが、それでは？鬼をも斬る剣？がもつたいたいというこらしい。

妖に対抗できる力は貴重なのだ。

邦のお偉いさんが協議している間、槌也は呆然と奥で寝ていた。

急激な体質の変化が堪えたらしい。

ときおり遠くで子供の声があった。一度など、部屋に女の子と男の子が駆け込んできたことがある。気の強そうな女の子と、礼儀正しい男の子だった。

槌也が声をかけようとすると、女の子の方が自分の唇に人差し指を立て、声を出さないようにと、合図をした。

遠くで人が走り去る音がした。

気のせいではなければ、五藤の声だ。

「申し訳ありません。お客様がいらっしやるとは、思いませんでしたので」

男の子が礼儀正しく頭を下げた。

「いくわよ」

と女の子が声をかけると、

「はい」

と嬉しそうに男の子が答えた。

最後に男の子がもう一度頭を下げ、なんとなく槌也も頷き返した。

二人が障子を閉めた後、走り去る音がした。

二人とも、やたらと綺麗な顔をしていた。女の子のほうは、開き始めた牡丹のように愛らしかったし、男の子の方は、妖艶なまでに美しかった。

小角のものは、子供のころから美形ばかりなのだ、とぼやける頭の片隅で思った。

他にも、被り物で顔を隠した、妙に貫禄のある客もあった。

いきなり

「邪魔するぜ」

との声とともに障子を開けて、じろじろと槌也を見たあげく

「これが土蜘蛛の末かい？ いい面構えだが、普通の人間に見えるぜ。二人も『先祖帰り』がいるなあ、おもしれえ時代に生まれたもんだなあ、ええ、おい。桜よ」

と、豪快に笑った。

客の後ろで千騎が、いつも飄々としているこの男にしては珍しく、苦虫を噛み潰しているような顔をしている。

土蜘蛛のことを知っていたことといい、千騎の態度といい、身分のある人なのだろうが、結局、この客が誰だったのか、槌也は知らない。

聞き及ぶ所によると鬼成は嬉々として小角の門弟を捕まえては修行につきあわせていたという。

風丸が鬼成に惚れたのもこの頃だ。

一通り議論が終わり、槌也と鬼成は呼び出され、小角の当主小角猛之にこの世の真実を聞かされた。

自分が土御門の血筋であること、それが妖の血族であること、この世の理、すべてが衝撃であった。その事実を踏まえた上で、土御門の家に入るように言い渡されたわけである。皇帝の沙汰とあつては抗うこともできない。

一度だけ、伯父にあつたが、父と信じて疑わなかつた相手に、頭を下げられたのは悲しかった。

領主の子として認められ、ふさわしい地位につくのだと、信じて疑わなかつた伯父は言ったものだ。

『今日からあなた様は、香月の人間ではありませんせぬ。土御門の家の人間として、ふさわしく振舞いなされ』と。

槌也は何もいえず、ただ頷いた。

鬼成は事件に関しては咎める事はしないが、いずれ小角の家に入ることとなつたのである。

こうして土御門の杜は六代ぶりに土御門の血筋の守人を得たのであつた。

槌也は先任の守人である小角の家のものに付いて、妖怪の狩り方を教わり、自らの能力の把握に努めた。自分から逃げることは出来ないのなら、せめて制御できるようになりたかつたのだ。

風丸は槌也とともに杜に来た。

二人が杜の暮らしになれたころ、先任者は小角の家に戻つていった。

かなりの高齢であつたから、隠居したのだという。

風丸三弥の大叔父に当たる人なのだそうだ。杜は広いので、風丸の名を持つものが守人に行はれることが多いそうだ。

風丸は舞人の家系だそうだ。

それから一年後、当主であつた守繁が急死した。遠乗りに出て、馬が崖から落ちたのだ。

跡継ぎはすでに決まっていたので問題はない。兄、守之が当主となつた。

むしろ守之の代になってからの方が、領内はうまくいっているよ
うだ。

自分のようなものは、疎まれて当然だが、守之は何かと心を配り、
気にしてくれる。

そんな兄に、心から仕えたいと榎也は思っている。

追憶 宿命（後書き）

鬼人伝で出てきた人たちがゴロゴロいます（笑）

どれが誰だかわかりますか？

とりあえず、鬼成が勝負を申し込んだのは血の誓約の前で、本編の時間は血の誓約の後ということになります。

異能 異端のもの

「未だに俺は自分が土御門の者だという自覚がない。むしろ伯父貴に仕込まれた武士道ってもんの方が強いな。兄上と呼ばせてもらうのも恐れ多いが、主君土御門守之様に仕えているって方がしっくりくる。俺を造反させるのは無理だぜ」

「そう。どうやらこちらの眼鏡違いね。そんなに忠義心があるとは思わなかったわ」

柚月は溜息をつく、槌也に正面から近づいた。柚月は丸腰だった。何か隠し持っているようすもない。なにか隠していれば、おいで分かる。

触れ合えるほど近くで柚月は足を止める。

「……なんのつもりだ」

訝しげに槌也が聞くと、柚月は微笑んだ。

「なら 死んでもらうしかないわね」

衝撃が槌也の体を襲った。

「ぐっ！」

脇腹に食らった一撃に、突き飛ばされたが、すんでのところで、転倒だけは免れた。

常人なら、脇腹をぶち抜かれていたところだ。

「……てめえ……超常能力者か……」

手をかざしたままの姿勢で柚月は青ざめていた。

「なんで、死なない……のよ……あたし……殺すつもりで……撃つたのに」

槌也は血を吐き捨てた。至近距離で食らったそれに、腸を少々はらわたやられた。

「様あ、ねえな。ぬかった」

どうやら柚月は刺客だったらしい。それも、得物を必要としない能力を持った、生きた凶器だ。

人には時々こういう変り種が生まれる。完全な人間にもかかわらず、妖あやかしのような特別な力の持ち主だ。

霊系を避けたところをみると、霊眼もあるようだが、それはさほど強くないだろう。でなければ、自分や鬼どもには近づかない。力を凝縮した気の球を撃ちだしているのが主な能力のようだ。槌也の強靱な肉体を貫くのは無理でも、常人なら余裕で殺せる。

柚月の掌に輝きが生まれ、力を込めた球となる。次こそ仕留めるつもりか、先ほどより強い力を感じる。

あれを食らえば、槌也とてただではすまない。骨くらいは折れる。

「覚悟お！」

「夜叉丸う」

自分に向かつて打ち出された力球を槌也は夜叉丸で切り払った。

壊された？力球？の欠片が見当違いの場所を破壊した。畳の一部、調度の破片が辺りを舞った。

ありえざる事態に、柚月が驚愕のあまり硬直する。

「驚いたみてえだな。こいつは、いわゆる魔剣ってやつさ」

槌也は夜叉丸を構えなおした。

美しい刃紋を持つ刃が光を弾いた。それはたつぷりと人外のものの血を吸った刃だ。

名人と呼ばれる刀工の鍛えた刀の中で、会心の出来のものの中に、極まれに妖物をも斬ることのできるものが混じっている。

いわゆる？魂の入った剣？だが、神剣、魔剣、妖刀呼び方は様々あるが、それは見つければ優先的に妖怪退治をするものに回される。ひとつでも多くの？魂の入った剣？を得るために、皇帝は名のある刀工を優遇し抱え込んできた。

槌也の夜叉丸もそのひとつだ。杜の守護を司るものに代々伝えられてきたものだ。

「妖怪が専門だが、神通力、霊力、法力の類もぶった切れる。不意打ちならともかく、おめえの力は通用しねえよ」

自分の力が通用しない事態など、柚月は考えもしなかった。

「そんな……あたしの……力が……」

柚月は激しく頭を振った。

「あたしの力は世直しのために授かったのよ！ 通じないなんて、あるはずがない！」

柚月は再び力球を打ち出すが、それはやすやすと切り払われる。

「世直しのため、授かったただあ？ 生まれつき持ってた力だろうが、数は多くねえが、人には時々そういう変り種が生まれるんだよ」

愕然と、柚月は槌也を見ていた。

「人間はな、時々とんでもねえ力を生みやがる。まじりっ気なしの人間のくせに、才能と修練で鬼をも切る剣鬼になるやつだとか、器物に妙な能力を付随させる名人とかよ。おめえのなんざ、分かりやすい力だよ」

槌也は夜叉丸を返すと、峯を肩に乗せた。

「引けよ。夜叉丸は、人間も切れるが、俺あ、真つ当な人間相手に、殺し合いする気はねえんだよ」

「あたしを……見逃すって言うの。あたしは、命を狙ったのに」

ふんつ、と槌也は鼻を鳴らした。

「殺せねえだろうが。おとなしく縛につけば、乱暴な真似はしねえよ」

槌也が不敵に笑い、柚月は唇を噛んだ。そのとき、廊下を走る音がして、障子がひき開けられた。

「槌也様、何事でございますか！」

柚月の姿を認めたものが叫んだ。

「やや、曲者！」

「馬鹿野郎！ 下がれ！」

騒音を聞きつけた警備のものが部屋へ駆け込んできて、一瞬、槌也の気がそれた。

柚月はそれを見逃さず、警備のものを？力？で弾き飛ばして、庭に逃れた。

弾き飛ばされた警備のものは同僚を巻き添えに、調度類に突っ込

んでいた。

「ちいつ！」

ふわりと袖月の体が宙に浮いて、塀を越える。跳んだのではない、力で自分の体を引き上げたのだ。

追いかけたい所だが、家中のもの前であまり人間離れた所は見せられない。

何よりも、槌也には効かなくても、常人ならば十分殺せる力を袖月は持っている。

「おい！ 大丈夫か！」

同僚に抱えられる？力？の直撃を食らった犠牲者に駆け寄った。

「気を失っておりませぬ。触れただけにしか見えませぬだが、あれはいつたい 槌也様、血が！」

「吼えるな、大した事はねえ」

槌也は無造作に口を拭った。

「ですが、そのお姿は」

？力？の直撃を食らった辺りの衣が裂けていた。肉体は耐えられなくても、その上の布は耐えられなかったようだ。あまりにも見苦しい。

「着替えくらいはあったな」

「はい」

「持つてこさせる」

「それはすぐにも、しかし、お体の方は」

「なんともねえ。鍛え方がちがわあ」

槌也は気を失っている護衛の傷を検めた。どうやら袖月が加減したか、とっさで力の集中が足りなかったか、したようだ。

痣になっているが、触ってみた感じでは骨も折れていない。

槌也は安堵した。

「怪我人の手当てを。追手は出さな。騒げば水野の家来衆に知れる。それより、夏姫の警備に人を回せ。こうやすやすと曲者に入り込まれたと知られたら、土御門の恥だろうが」

実の所、袖月に追手など差し向けても怪我人や死人を出すだけだ

ろう。あの能力はただの刀では防げない。仲間も最低十数人はいるはずだ。

「それより警備の責任者と、宿の手配をしたものを呼べ。問い質したいことがある。言っておくが詰め腹は切らせるな。祝い事を血で汚したくないからな どうした？」

返事をせずに硬直している臣下に槌也は尋ねた。

「い、いえ。なにも かしこまりました」

家中のものはかしこまり、指示されたことを果たすため怪我人を連れて下がった。

槌也はその反応で、自分の失策を悟った。家臣の前ではできるだけ畏まっていたのだが、急場で素地が出てしまった。

まずいなあ ただでさえ、評判悪いのによお ああ、もう

面倒臭い、急場だ、今夜は猫はなしだ、猫は

後悔しても後の祭りというやつだ。

槌也は着替えをすませてから警備の責任者と宿の手配をしたものと面談した。

宿の警備の状態と、この部屋を槌也が使うことを誰が知っていたかを調べるためであった。

袖月は先回りをしていた。自分さえ到着するまで知らされていないかった部屋をどうやって知ったものか。

行列を待ち伏せしていたことといい、何者かが手引きしたとしか思えなかった。

結果は、『その気があれば誰でも知ることができる』であった。

この宿では数日前から高貴な方がお泊りになるということで、気合を入れて部屋の支度をしていた。

特に高級なものを取り揃え整えていたのが、夏姫の部屋と槌也の部屋である。揃えられたのが男物か女物かで、どちらが泊まるかは一目瞭然である。

そこから手繰ることは不可能であった。

どの街道を使うかは、予め知ることのできる者は限られてはいるが 国許や皇都の上役に限られる 出立した後ならどの街道を使っているかはあきらかで、伝令がわき道を使って追い抜いたことも考えられる。

女足にあわせている行列を抜くのは簡単だ。馬を使えばすぐだ。

「なんとも、汗顔の極みでございます。これほどやすやすと曲者の侵入を許すとは！ 皺腹搔つ捌いて、お詫びいたしたい所でございます」

警備の責任者である岡部孫兵衛が、今にも責任を取りたいといわんばかりに訴えるのを、槌也は手を振って止めた。

「本命には何事もなかったんだろうが、かまわねえよ。陽動だろう、俺が襲われたのは」

「陽動で、ございますか？」

完全に狙われたのは槌也だが、あえてそれらしい嘘をつく。嘘も方便という。これくらいは仕方ない。

「そうだろう。一行で襲われるのなら夏姫だろうが。護衛を襲う理由なんて、他にあるかよ。夏姫が無事ならおまえは務めを果たしたんだ、腹切る謂れがねえだろうが」

「それで、追手は出すなど、た、確かに、そうでございます。いや、慧眼、恐れ入りました」

深々と頭を下げる岡部に、槌也は溜息をついた。実直なのだろうが 扱いづらい。

これくらい言っただらねば、実直すぎるほどに実直なこの男は、詰め腹を斬る。

殿に申し訳が立たないというのだが、守之にしても、信頼するこの男を失うのは痛手だろう。

腹を切るより、誠心誠意仕えるほうが、守之も喜ぶだろう。

槌也は話題を変えた。

「それより、世事に疎くなっていたが、国許で世直しを説いている者がいるのか？」

岡部は背筋を伸ばして、顔を引き締めた。

「誰がそのようなことをお耳にいれました」

「いるんだな？」

「天童教とか申す、不逞の輩でございます！ 自分達の教祖こそ、天からつかわされたなどと申し、人心を惑わし軽拳妄動を煽る、不埒者供でございます！ そのような者どものこと、誰が槌也様のお耳に！」

今にも湯気でも噴きそうなほど真っ赤な顔をして、岡部は喚いた。
「事もあろうに、天の使いを自称するなど、御開祖様への冒瀆！

殿も捨て置けぬと捕縛を命じておりますが、いつも今一步というところで、取り逃がしております！ ああ、あの不埒者どもが！」
「そうか。すっかり世間に疎くなっていたな、そんなもんが蔓延っているとは知らなかったぜ。ご苦労だった。もう下がっていいぜ。
夏姫の警備を厚くしておいてくれ。それから」

槌也は辺りを見回した。血で汚れた畳と、一連の騒ぎで壊れた調度類が目に入った。高価なものだろうに、嵐が通ったような有様だ。もったいない、と槌也は溜息をついた。

「これの弁償をしておいてくれや。それくらいの予算はあるだろ」
土御門は大名なのだ。下々のものに迷惑はかけられない。幸い裕福な家でもあるのだ。

「は、わが藩の威信にかけて」

岡部は深々と頭を下げた。

槌也は思わず口には出来ない感想を抱いた。

(いや、何もそんなもんかけなくとも)

槌也は領地内で囁かれている自分の噂を詳しくは知らなかった。ろくでもない噂ばかりと承知しているが、一々聞くのも馬鹿らしい。故に、岡部が自分の事を日々見直しているとは、まったく分からなかったのである。

「このお部屋では、寝られませんか。すぐに別の部屋を仕度させませましょ」

「悪いが、そうしてくれ」

さすがに、ここまで荒れた部屋では寝られない。警備が厚くなれば、さすがに夏姫も忍んでは来ないだろう。

岡部は顔を上げると、大真面目に槌也に意見した。

「時に、槌也様。こうなると槌也様にも宿直をつけませぬと」

「いらん」

槌也の応えは素っ気なかった。

「しかし、また曲者がいつ現われぬとも限りませぬ」

襲撃があつたばかりだ、さすがに岡部も簡単には折れない。

「……こう見えても、腕に覚えがあるんだが……人の気配が近くにあると、鬱陶しい」

「蒲生流と聞き及びました。確か皇都でも名門の 嬉しそうな顔をした岡部は、ここで表情を引き締めた いえいえ、御身は殿の たつた一人の御舎弟。ただの護衛とは言えませぬ」

「いらん」

しばし押し問答が繰り返され、槌也が譲歩案を出した。

「それじゃあ、こうしよう。俺より弱い奴をつけたって意味がねえだろう。一人選びな、そいつが素手で俺を押さえ込めたら、明日から宿直をつける。逆に俺がそいつを押さえ込んだら、二度と宿直をつけるとい話はしない。どうだ？」

「よろしゅうございます。わが方でも選りすぐりの者を連れてまいりますしゅう」

護衛の実質的責任者、岡部孫兵衛は胸を張った。護衛に選ばれたものは、岡部が手塩にかけて育てたものが多い。自信満々である。

「されど、よろしゅうございますか？ 曲者に脇腹を打たれたとか」

「もう治った」

嘘ではない。槌也の強靱な肉体は治癒力も人の比ではないのだ。

「脇腹が痛むせいで負けたとは、聞きませぬぞ」

槌也の言葉を兆戦と受け止めた、岡部が顔をしかめた。

「かまわん。言わんさ、その必要がない」

槌也は不敵に笑った。

「一言はございませんな」

「もちろんだ」

結局、槌也に宿直が付くことはなかった。

異能 異端のもの（後書き）

うひゃひゃバトルバトル。この戦闘シーンが書きたいからこのお話を書き始めたようなものです。思ったよりみじかくなっちゃたな、という感じですけど。

天童教 まやかしの救い

「なにやら、疲れているものが多いようじゃの。なにかあったのかえ」

出立をつげに来た槌也に、夏姫は駕籠の中から問いかけた。

「何事も。気散じに、少々相撲など。お騒がせしましたか？」

「勝ったのは誰じゃ」

「わたくしで」

「さようか。殿御はいつまでも童のようじゃの」

夏姫は涼やかに笑った。

槌也の相手を務めた早川と、岡部が苦虫を噛み潰したような顔をしていたのは余談。

警備を厚くしたのが効をなしたか、あの後は何事も起きなかった。水野の家臣には急に増えた護衛に訝るものもいたが、用心のためといわれれば納得するしかない。

出発の合図が告げられ、一行がゆるゆると進み始めた。

槌也は足を止めたまま、動かない。

「どうかなさいましたか？」

「悪いが先に行ってくれ、野暮用だ」

わけがわからぬものの、岡部は一礼し、先に進んだ。

槌也はたびたび行列を止めたり、動かず先に行かせたりするが、理由は一切明かさない。何事もなくすんでいるから、岡部も黙認する。

槌也は行列を先に行かせ、一点を睨み続けていた。

やがて一行の姿が見えなくなつて 槌也は商家の二階に向かつて不敵に笑つて見せると、行列を追いかけた。

その姿を見送っていた者達がいた。

槌也が睨み続けた商家の二階、そこに袖月とその一行は隠れていた。一行が泊まった宿のものが見れば、その中に数日前から奉公に

来ている男の顔を見ただろう。

雨戸の陰に隠れ、行列を見送った柚月は唇を噛んだ。

「忌々しい。あれは分かっていたね」

槌也は自ら鼻が利くと明言していたが、どうやって探り当てるものか。

「仕掛けないのか？」

仲間の一人が尋ねた。柚月は首を振る。

「無理だ」

「このまま手をこまねいているつもりか？」

柚月は同士に冷たい目を向けた。

「あの妙な術をもう一度味わいたいのか。ここは退いて天主様の支持を仰ぐしかない」

あの妙な、蜘蛛の糸のような細かい気は、柚月の力で引き千切ろうと思えば、相当な力の集中がいる。そんなものを食らえば、仲間もただではすまない。

「まったく信じられん、おまえの力が効かないとは」

そういう男も自分から仕掛ける気などさらさらない。ここに居る者の大半が槌也の術を喰らって、金縛りになっている。槌也の存在を恐れている。

まず、槌也を排除してからでなければ、自分から仕掛けようとはしないだろう。

柚月にだから言えるのだ。

「土御門に戻るう」

「しかし、天主様の言いつけが」

「では、小弥太がやるか？」

柚月がいうと、男は青い顔をして首をふった。

「おまえ　宿の奉公人を見て　は宿に戻り、少ししてから何か理由をつけて戻ってこい。すぐに辞めては疑われる。私達は手はずどおりに　」

「そうだな、そうするしかあるまい」

やっと全員の意見があつて、刺客一行は腰を上げた。

天主様の言いつけをひとつも果たせないのは、恥ずべきことだが、袖月の力さえ効かないのではなす術がない。

袖月は天童教でも特別扱いだ。みな、面には出さないが袖月を化け物だと思つている。袖月もそれに気づいてはいたが、どうしようもない。

袖月は生まれつき妙な能力があつた。思うだけで物を動かすことができた。

他人がそういう力がないということ、小さいころは知らなかつた。

また、回りも小さな子供の言うことを真に受けることもなかつた。だが、やがて袖月の能力に気づくと、肉親さえ石を投げ袖月を追い払つた。

？化け物？と。

そんな袖月をひろい、受け入れてくれたのが天主様だ。

曰く、その力は世直しのために授かつたのだ。天の授けてくれたものを誇りにするがいいと　袖月に居場所をくれた。

それからは言われるままに天主様に仕えた。天童を演じ、言われるまま力を示し、また密かに人を殺めた。

天主様はそんな袖月を特別に可愛がつてくれていた。

この失態でどれほど天主様を失望させるかと思うと、いたたまれなくなる。天主様は袖月の不甲斐無さにお怒りになるだろう。

？世直しのため、授かつただあ？　生まれつき持つてた力だろうが、数は多くねえが、人には時々そういう変り種が生まれるんだよ？

ふと、槌也の言葉を思い出し、袖月は不機嫌になった。

？人間はな、時々とんでもねえ力を生みやがる。まじりつ気なしの人間のくせに、才能と修練で鬼をも切る剣鬼になるやつだとか、器物に妙な能力を付随させる名人とかよ。おめえのなんざ、分かりやすい力だよ？

もし、そうならなぜ自分は化け物と、家族からさえ呼ばれなけれ

ばならなかったのか。石もて追われなければならなかったのか。

（戯言よ。あたしを惑わせるための、虚言よ。騙されるものですか）
袖月の力を知りながらも、槌也は袖月を人間として扱った。

？引けよ。夜叉丸は、人間も切れるが、俺あ、真つ当な人間相手に、殺し合いする気はねえんだよ？

袖月は頭を振った。

心のどこかで槌也の言葉を信じたいと思っていたのかもしれない。人としては異質な力を土御門槌也も持っている。槌也もまた、化け物と呼ばれたことがあるのだろうか。

天童教の教祖天主は本名を権左ごんざといい、ある浜辺で漁師をしていた。

実はこの男、騙りである。

そもそもは数年前、袖月を拾ったことに起因する。最初、行き倒れた子供と思い、袖月に施しを与えたのである。

やがて回復した袖月に奇妙な力があることを知り、最初は追い払おうかと思っただが、これは使えると考え直した。

行き場のない袖月をうまく手懐け、奇妙な形をして世直しだの、天からつかわされただのもっともらしい事を言い、袖月の力を見せつけて幾らか騙し取る。

その程度の騙りだった。

それがうまくいきすぎた。

なにせ袖月の力は仕掛けのない本物である。天の使いとの言葉を真に受け、寄進は集まるは、弟子志願の若者は集まる。村や町の有力者さえ言いなりだ。権左は有頂天になって、さらに大風呂敷を広げる。

いつの間にか、金を巻き上げるといふ目的を忘れ果て、自分の王国を作るといふ妄想にとらわれた。心から自分を信じるものに囲まれ、ちやほやされているうちに、自分を見失っていたのだ。

権左にそんな器量があるはずがない。どこまでも、ただの騙りで

ある。それを省みず、偉そうなことが言えるのは、回りの信者の盲信のせいであった。

そのうち武家のお偉いさんまでよってくる始末。

実の所、目障りなものをどうにかしてくれという相談が多いのだが、それは柚月にやらせればいいのである。

万が一何かあれば、扮装を解いて金を持って逃げればいい。

信者が知っているのは頭巾で顔を隠した姿だけであり、素顔に戻ってしまえば誰もそうとはわからない。

世直しも、天からの使いも嘘っぱち。常に逃げる用意を怠らなかつた。それが　こんな事になるうとは　神ならぬ身の知るところではなかつた。

「天主様」

「お、お助けを！」

「ぎやあああ」

「化け物！　化け物じゃああ！」

いくつもの悲鳴を尻目に、権左は逃げていた。もはや命あつてのものだね、他人に関わっている余裕などない。

信者が何人死のうが、知ったことではない。

ここさえ切り抜ければ、隠しておいた金でいくらでもやり直せる。葉ずれの音が追いかけてくる。何かの足音と、息づかい。それはもはや恐怖の象徴だつた。

権左は悲鳴を上げた。

「柚月、柚月いい」

権左に特別な力などない。

あるのは小姓に化けさせた柚月の方だ。

小姓姿をさせ、身近においていたからこそ、誰もそれを疑わなかつた。

だが、柚月のいない権左はただの人間に過ぎない。

捕まれば、引き裂かれ喰われるしかない。

「助けてくれえ、柚月いい」

権左の叫びは誰の耳にも届かなかった。

天童教　まやかしの救い（後書き）

思ったより敵が弱かったでしょう？という話です。

ええまあ。おろかな人間の思い上がった行動が取り返しのつかない事態を招く、それ自体はよくあることです。槌也たちがどう始末つけるのがこの話のメインかもしれません。

茶番 北の隠居の一刺し

土御門の領地の土を踏んだとき、槌也は思わず背筋を伸ばした。
(うわっ！ なんだ、これは！)

ある程度近づけば槌也には杜の結界の様子が分かる。結界はかなり破損していた。すぐにも戻って直したいところではあるが、夏姫を城へ送っていかねければならない。

あの後、諦めたのか袖月達の待ち伏せもなく、主従の夜這いも警備を厚くしたためかなくなり、実に順調な旅だった。

あと少しというところで、こんな事態が待っていたいようとは。

「どうかされましたかな、槌也様」

道中、実質護衛の責任者であった岡部が尋ねてきた。

「い、いや、なんでもない」

岡部にはその手の才能はないし、表ざたには出来ない。
気を探ってみた所では、妖気はもれてはいないようだ。小角がなんとかしてくれているようだった。

「小角がなんぞ手抜きかりでもしたのかの」

駕籠の中から夏姫が声をかけた。

「い、いえ。そのようなことは……」

この中で、杜の事情を知っているものがあるとすれば、夏姫くらいなものだろう。

「逸る気持ちは分かるがの、この身を城に届けてもらわぬと困るのじゃ」

「はっ、それはもちろん」

「では、もうしばらく茶番につきおつてもらおうかの」

(茶番？ なんのことだ)

不審に思った槌也だが、それ以上はたずねず、城へ急いだ。気は急ぐが、行列を急がせるわけにもいかなかった。

某所 ある人物たちが話し合っていた。

「そろそろ水野の夏姫は、土御門の城に着くころあいじゃねえか？
いかにも貫禄のある者が、伝法な口ぶりで言う。」

「さよう。あの姫には少々頼み事をしておるが 気性のしつかり
した姫ゆえ、務めをはたしてくれよう。」

痩せた高齢の者が応えた。

「おめえの、しつかりつてのは、怖えんだがなあ……。」

男は顔をしかめた。

「なんにしろ、不義密通を唆すなんざ、滅茶苦茶だろうが。本来な
ら、大罪だぜ。」

男は首の後ろを叩いた。

「土蜘蛛の『先祖帰り』の顔を拝ませてもらったことがあるがよ、
ありゃあ、親父と違ってまともだぜ。兄嫁に手え出すようにや見え
なかつたぜ。」

「まだ守之殿と夏姫の婚儀はなつておらぬ、不義密通にはあたらぬ」
「そういうのを屁理屈つて、言うんでえ。親父みてえになんにも
手えだすのも、困るけどよ、今度の策はあ、無理だつて。よくまあ、
こんな非道な策、考え付くよなあ……確か、夏姫つて、おめえの妹
の孫じゃなかつたか？」

「さよう。それが何か？」

本当に、顔色ひとつ変えずに老人は言い切った。

「あいつかわらず、血も涙もねえなあ」

老人に比べれば、いささか人情に弱い男が非難をこめて言う。

「天下太平のためなら、安いものじゃ」

その程度では老人はびくともしなかつた。

「頼みごつてのは、なんでえ？」

「ちよつとした言付けじゃ。守之殿も、今は知らぬが、是非とも知
りたきことである。」

「おめえにしては、親切じゃねえか。気味がわりいな。裏があるん
じゃねえだろうな？」

「裏などない。さぞ、喜んでくれるものと、思っておるぞ」

「どうだか。策が当たったとして、弟と密通した妻と添い遂げろってか？ おめえ、人の情つてもんをなんだと思つてやがる」

老人はもはや答えを返さなかった。

奥の方でただ一人、一言も口を利かなかった男が溜息をついた。

この男の妻は、老人の娘である。

城では当主土御門守之と夏姫の対面が用意されていた。その場には家臣一同も呼ばれている。

大刀だけは入り口で預け脇差のみだが、正装に身を固め、形式を整え役職の上のものから上座に近い席についている。

本来国許仕えの、いや、皇都勤めの家臣でさえ目にするこのない正室様（予定）の姿が拝めるとあれば、緊張するなというほうが無理だ。一同かしこまって控えている。

すっかり正装を着込んだ家臣一同の前で、やがて正室となる夏姫が歳相応の愛らしい姿を現していた。まだ愛らしさが勝つてはいるものの、やがてどこまでも美しく咲き誇る名花の蕾。そんな風情である。

殊勝に頭を下げつつ、その姿をこっそり盗み見る家臣は多い。

「ようこそおいでくださいました。夏姫」

「守之殿かの。このたびは夏の物見遊山に骨をおつていただき、かたじけない。しばらくは宿をお借りいたすが、なにぶんにもこちらの作法は分からぬゆえ、教えてくださいませ」

「夏姫様のお気に召すものがあればよいのですが」

和やかな会話を聞いている分には、さすが高貴なる血に連なる方と、気品を感じさせる物腰だが、本性を垣間見ている槌也は思わず顔を強張らせた。

（ 見事だ 見事すぎる猫だ ）

自分では足元にも及ばないと、槌也は素直に認めた。

「 ときに守之殿、この夏、北のご隠居から土産話を預こうとお

る」

「北張のご隠居の？」

これは守之も初耳だったようだ。

扇で口元を隠しつつ、夏姫が微笑んだ。

「天童教とか申す者どものことじゃ」

「や、これは……北張のご隠居様の耳に……それは、なんとも耳汚しで」

場がざわめいた。

「守之殿も捕縛を命じておるに、逃げられておるそうな」

「これは、面目ない。そこまで」

守之は恥じた。

領地の管理は領主に任されている。領主が好きなように治めていい。

しかし、あまりに領内が乱れていると、領主にその資格なしとして、領地削減、お国替え、お取り潰しとなる。

天の使いを称し、人心を惑わせている者を野放しにして、捕まえられないとなれば、能力を疑われても仕方ない。

ましてやそれが北張の隠居に知られたとあれば、皇帝や皇家には筒抜けだ。

まさしく、面目丸つぶれである。

古の約定により土御門にそれはないが、それだけに能無しの判を押されたも同然だ。

それが許嫁の口から出たとなれば、なおさらだ。

夏姫は優雅に扇をふった。

「さても仕方のなきことよ、守之殿の傍に、天童に通じておるものがおっては、のう」

ちらりと夏姫の目線が控えている家臣一同に向けられた。

「なんと申される！」

「妾が言付かってきておるは、その不埒者の名よ、聞きたいかの？
守之殿」

ころころと鈴を鳴らすように夏姫が笑った。場のざわめきは頂点に達しようとしていた。

「その者の名は」

槌也は弾かれたように顔を上げた。人のおいは感情で微妙に変わる。槌也の嗅覚は、殺気のおいを嗅ぎつけていた。

「柿崎兵武」

夏姫がその名を口にするか否か　その刹那に脇差を抜いて夏姫に斬りつけようとした者がいた　ひとつの影が一瞬でその前に立ちはだかり、その手を捕らえて捻り上げ、脇差を落とさせると、背中に体を被いかぶせ、取り押さえた　まさしく刹那の出来事　その者の席が上座に近かったことと、あまりにも意外な相手であったため、とっさに対処できたのは槌也だけだった。

「脇差を！」

槌也に言われ、慌てて回りのものが脇差を取り押さえ、遠ざけた。

「柿崎殿……」

「何ということを！」

騒然とする一同。無理もない。

やがて正室となる予備血統家水野家の姫に、筆頭家老が斬りかかったのだ。

夏姫が優雅な流し目を送った。

「そちが柿崎兵武かの。なんとも見苦しいさまよの。この不忠者が襲われかけたというのに、夏姫は微動だにしていなかった。

柿崎は押さえ込まれたまま、わめいた。

「こ、この柿崎が、天童教に通じておると、言われるか！　なにを根拠に！」

「そなたの今の所業が、何よりの根拠であろう？」

夏姫に鼻で笑われ、柿崎がたじろいだ。

夏姫の追及はとまらない。

「そなた今なにをしようとした？　わが無実を訴えようとしたかえ？　濡れ衣を着せられる恥辱に腹を切ろうとしたかえ？　違う

である。妾の口を封じようとしたであろう。それも名を口にする前に、抜いておつたの。わが名が出るのが分かつたおつたのである。違うかえ？」

ぐつと柿崎が息を飲んだ。

夏姫が勝ち誇つたように喉をそらして笑つ。

「そなた、守之殿にはよう側室を持つよう申しておつたそうじゃな。土御門は子ができにくいゆえにのう」

守之が顔を赤らめた。

どうやら事実のようだ。北張の隠居が調べたものだろうが、そんな内々のことをどうやって探り当てたものか。

恐るべし北張の隠居。

夏姫は謡うように続けた。

「されど、その実、我が息のかかつたものを守之殿の寢所に送り込み、そこから藩政を私しようとする腹が見え見えじゃ。守之殿が渋つている間に、この夏との縁談が持ち上がり、さぞ慌てたであろう。正室が予備血統家では、さすがにいくら側室でも憚らねばならぬ。そなたの野心、風前の灯じやのう」

くすくすと扇の陰で夏姫が笑つた。

「そこでそなたは夏を亡き者にしようとする。理由はいくらでもつけられようが、かねてから通じておつた天童の者を動かした。そうであろう。夏は道中、哀れ刺客の手にかかり果て、榎也殿は責を問われる。そなたは傷心の守之殿に側室をすすめ、関心を得る。そういう筋書きであろう」

夏姫は最初から襲われることを予想済みだったのである。おそらくは襲撃があつたこともお見通し。密通を唆している裏で、我が身を餌に内通者を釣り上げた。

夏姫は妙に優しい声で囁いた。

「さぞ無念であるうなあ、こうして夏は傷ひとつなくこの地にまいた」

「柿崎が、姫を襲わせたと申されますか？」

さすがにこれは守之も黙ってはいられなかった。柿崎は筆頭家老。色々口出しはするものの、すべては御家のためと考えてのことと思っていた。しかし、そのようなことは、間違っても土御門のためではない。

夏姫はくすくすと笑って、槌也に流し目をくれる。

「それは、それ、護衛の者に聞かれるがよからう」

「おのれ、柿崎！ 道中の計画を細かく聞いていたは、姫を亡き者にするためか！ こ、この不忠者おおお！」

顔を真っ赤に染めて、岡部が怒鳴った。筆頭家老の柿崎であったため、道中の宿屋や道筋を聞かれても不審に思わなかったのだ。そうして柿崎が手に入れた情報が天童教に伝わっていたのだろう。

柿崎を押さえつけながら、内心槌也は舌を巻いた。

(とんでもねえ、姫さんだぜ)

命を狙われていると知りつつ平然としていたのは、槌也の能力を知っているからだろうが、なんと目太い肝の持ち主である。

冷徹の北張、豪気の西州、気品の南戸と世間では評しているが、冷徹であり続けることは、ある意味とてつもなく剛毅でなければならぬ。

「し、証拠は、ございますのか……」

未だ悪あがきをする柿崎に、夏姫は冷笑を向けた。

「おや、北張のご隠居が証拠まで掴んでよいのかの？ 家老の一人が予備血統家の姫の命を狙ったとあらば……まして、皇帝のお声かかりの縁談を潰すための 皇帝様の命を蔑ろにする、即ち、謀反じゃの。土御門もただではすまぬぞえ？」

一同は息を飲んだ。確かに事が公になれば、土御門に咎が及ぶ。

「したが、当主が獅子陣中の虫を成敗するに口出しはせぬ」

見て見ぬ振りをしてやるから、身内で治めろという意味だ。

「証拠を見つげ出すは、土御門の仕事よの。あると分かっているものを探すのじゃ、雲を掴むよりはましじゃろう。忠義の見せ所じゃ、張り切るがよいぞ」

『ははっ！』

家臣一同が、夏姫に向かって、深々と頭を下げた。

夏姫と北張の隠居がしたのは、夏姫を土御門に送り、内通者の名を告げただけである。それだけで土御門に巨大な恩を売りつけた。踊らされた柿崎も愚かだが、これが政治というものかと、槌也は空恐ろしくなった。

夏姫は、これでまだ十五である。

「槌也様、代わります」

警備の者が槌也に声をかけた。それまでずっと一人で柿崎を押さえ込んでいたのだ。

さすがに押さえ込まれたままというのは、哀れであるし、見苦しい。

槌也は柿崎を警備の者に渡そうとした。

柿崎は土御門の中では名門の出で、長く筆頭家老を務めていた。

いかに咎人となろうとも、下っ端の警備の者では遠慮があった。そこに隙があった。

柿崎は警備を振り切り、何事かを喚いて夏姫に飛びかかろうとした。

槌也はとつさに手加減をして当身を食らわせた。手加減をしなれば、腹をぶち抜いてしまう。

柿崎は声もなく崩れ落ちた。

「往生際の悪い」

ふんつと、槌也は鼻を鳴らした。柿崎のあがきは見苦しかった。

この後、夏姫をどうしようかと、柿崎の破滅は変わらない。

潔く腹を切れば、まだ酌量もあったものを。

「死んだのかの？」

「いえ、当身をあてただけにて」

「それは何より。聞かねばならぬ事があるからのう」

夏姫は、柿崎の生死というより、柿崎の口からもたらされる情報の方を心配したようだ。冷徹もここまでくると、見事である。

改めて守之が夏姫に礼を言った。

「この度の事、わが家中にこのような不心得者がいようとは、なんとお詫びしてよいやら……北張のご隠居様にも」

「よい。土御門のことはもはや妾にも人事にはありません。妾はご隠居の言付けを申したのみ。ご隠居様はお見通しでありましよう、こうなることを。妾も守之殿のお役に立てたはなにより。そうでございますよう」

優雅に夏姫は笑って見せた。

「妾は長旅で疲れておりますゆえ、下がらせてもらいます。後はよいように」

優雅に夏姫が辞去すると、守之自身が声をかけ、事件の解決に乗り出した。

まさに土御門の威信がかかっている。おそらくは、守之がどう事を収めるか、北張の隠居の目が光っているに違いない。

柿崎は気を失ったまま牢に運ばれ、家のものはそのまま捕まり、その屋敷には捕り方が向かった。

槌也はやつと護衛から開放された。開放感より疲労を感じ、槌也は溜息をついた。

（兄上、本当にあれを嫁にするお積りですか！ 本当に、あれでいいのか！ あれが義姉かよ！。近寄りたくねえ！）

決して口には出来ぬ感想を、心のうちで喚くだけだ。

「槌也、大儀であった」

「兄上」

「槌也様。大手柄でございますぞ」

上気した岡部が褒め称えた。

「昨日の夜襲といい、柿崎めの反逆といい、槌也様がおらぬばどうなっていたことか！ この岡部、槌也様を見誤っております」

「夜襲とな。やはり道中なにかあったのか」

詳細を聞いたがる守之に、切羽詰った槌也は訴えた。

「それは後日。それよりも、杜の方が……兄上、一刻も早く下がり

とつございます」

「！ 杜になにかあったか？」

「結界に、大穴がいくつも開いております。このままでは……」
妖が野に放たれることになる。

「はて？ 森といえますと、お狩場のことで？」

事情を知らぬ岡部は首をひねったが、守之は顔色を変えた。守之も土御門だ。杜の重要性はわかっている。

「許す！ 槌也、杜の守護は御開祖様より土御門が仰せつかった仕事じゃ！ 蔑ろにはできぬ。はよう下がるがよいぞ」
「は」

槌也は短く答え、頭を下げてから大広場を下がった。

混乱する城内をいいことに、人目につかぬ所で窓から降りて、庭に降り立った。入り口でひっさらうように夜叉丸を取り戻し、一目散に駆け出した。

いやな予感が振り払っても振り払っても、湧いてくる。こういふときの勘は、いやなことによく当たる。

「間に合ってくれよ」

茶番 北の隠居の一刺し（後書き）

こええ！北血筋こええ！にもかかわらず、葉月ちゃんがどうしてあ
あいう性格なんでしょう？お祖母さん似？

とりあえず、人の陰謀はここまで。この後は人外魔境となります。

社の結界

走りに走って、社の入り口が見えたとき、面前に風丸と五藤が現われた。

「何があつた!」

このさい礼儀も何も後回しだ。ここまで近づけば、結界の様子がはっきり分かる。

崩壊するまでには至っていないが、大穴がいくつもあいてはざるも同然だ。

これは間違つても五藤が斬つたものではない。規模が大きすぎる。

「申し訳ございませぬ。されどこれは」

弁解しようとする風丸を、槌也はさえぎつた。

「心当たりはある。いつからだ」

「槌也殿が出立された次の日だ。俺の霊眼に狂いがなければ、外から壊された」

槌也は舌打ちした。

おそらくは柚月の仕業だ。

最初に網を壊されたときに気づくべきだったのだ。

「それからやたらと小物が湧く。三弥に言わせれば、これほど出るのは珍しいというが、外に出さぬようにするのが精一杯だ」

「そうか、とりあえず、外回りだけでも直すぞ」

槌也は社に向かって走つた。

「若、心当たりとは?」

「柚月だ。いつぞや社に入り込んでいた男装の女、あやつ超常能力者だ」

おそらく水野家に向かった後、出会う前の間に結界にいくつもの穴を開けておいたのだ。結界の主である槌也ならともかく、いくら?遠見?や?霊視?のできる風丸や五藤でも結界すべてを見通すのは不可能だ。

「しかし、なぜ？」

「俺が知るか！」

槌也は腹立ち紛れに怒鳴った。

「槌也殿、ここはお狩場で、御止め場だったな。役人すらめったに入らぬという」

「そうだ」

「ならば、人目をはばかるものが、利用しようとするのではないか？」

隠れ場としてこれ以上の場所はない。しかしそれはそこが尋常の場所ならばだ。

「普通の人間なら、入り口辺りで俺の霊系に触れて引き返す。そうでなくとも、ここに溢れる妖気で気分が悪くなるはず」

そこまで言つて、槌也の脳裏に閃くものがあった。杜に誰も足を踏み入れないのは、おふれもあるが、もともと杜に溢れる妖気を、それと知らず嫌がるからである。さらに霊系を張り巡らし、それを増長させて引き返させるからくりだが、それをものもしない存在に気づいた。

「柚月か！ あいつ、天童教とかいうのの一人だったな。杜を利用するつもりか」

超常能力者ならば、残留妖気くらいではびくともしない。霊系も例の力で千切られる。今思えば、最初であった時の破損は柚月の仕業だ。

霊眼は利く方ではないようだったから、ここが恐ろしい場所だとは気づかなかつたのだろう。

「できるのか？」

「無理だ！ 人のおいなんざふりまかれた日には」

馳走のにおいにつられて、外のものがこちら側に入ってくる。

杜の地を踏んだ途端、槌也は唸った。

「馬鹿が！ 誰か入り込んでやがる！」

槌也の目が赤く染まった。

小屋　　のように見える残骸　　槌也が出立したときにはなかったもの　　に群がる妖怪と　　十数の人　　に襲い掛かる妖怪とそれを返り討ちにする袖月　　が見えた。頑張ってはいるもの、さすがに数が多すぎる。時間の問題だ。

侵入する奴が悪いといえはそれまでだが、まさか見殺しにも出来ない。

「ひとつはもう無理だ。もうひとつは、袖月がいるか。少しはもつが、出るまでもたん」

「位置は」

槌也はある方角を指差した。

「こつちだ。結界の端近くまで戻ってるが、たいしてもたん」
「では」

風丸が足を踏み鳴らし、三人の姿がその場から消えうせた。

蜘蛛と鬼

「力球？を打ち出し、またひとつ異形のを葬り去った。

「な、なんなのよ、この森は！」

以前入り込んだときにはこんなものはいなかった。散々異形のものに襲われ、もはや取り繕う余裕はない。袖月は素に戻っていた。

またひとつ、異形のを屠る。これでひとまずあたりのものは一掃したが、力も気力もつきかけていた。

「何とかしろ、袖月」

「こいつらは、おまえが呼び寄せたんじゃないのか、化け物同士だからな」

同行していた仲間が袖月をののしった。だが、罵声が出るものはまだまじだった。

怪我を負い、ひいひい泣き続けているもの。

天主様への祈りを続けるもの。

みなのお精神の方が限界だった。

葉擦れの音がした。

袖月は相手も見ずに？力球？を放った。

「力球？が断ち切られ、見当違いの場所を破壊する。

「助けてやろうつてのに、これはないだろうが」

不機嫌な声とともに現われたのは、土御門槌也だった。

「いつぞやと違い、正装してはいるが走りでもしたのか、着乱れている。」

「声が出ず袖月はその場にへたり込んだ。」

「これほど、人の姿を心強い、と思っただことはない。」

「殺そうとした相手とはいえ、化け物よりはましだった。」

「ひ、人か」

安堵も明らかな信者の声に、槌也が人の悪い笑いを浮かべた。

「残念ながら土御門と小角だ」

「また、そのようなことを」

涼やかな声がして、槌也が一人ではないと分かった。

「こやつらか、天道教とか申すのは」

後ろから現われたのは、いつかの小袖姿の男と、初めて会う美文夫だった。

人に会えたという安堵に、信者たちの腰が抜けて、全員がへたり込んだ。

森から出られたわけではないが、希望が見えてきた。

たとえ森から出られても、捕まるだけだが、化け物に食われるよりはいい。

「最初に言ったよなあ、命がねえぜ、と」

「」

確かに槌也はそう言った。あれは真実、そのままの意味だったのだ。

「人のおいなんざ、ふりまかれたら小物が湧いて出るだろうが。」

さっさと、出て行ってもらわなきゃ、こっちが困る」

槌也が袖月に手を伸ばした。

袖月は思い出した。

ここは代々の領主の『お狩場』で、槌也はここに住み着いているのだ。そして愛刀を妖怪が専門と言いつつ切った。

「あ　あれはなんなの」

「見ての通りだ。なんに見える」

「ば、化け物」

それ以外に言いようのないものだった。

「妖怪とも、魑魅魍魎とも呼ぶがね。そのとおりだ」

槌也が袖月を掴んで立たせた。

「この杜に入ってから、まともな生き物を見たか？　鳥の声や、虫でもいい」

袖月は頭を振った。言われて見れば、聞こえて当たり前前の鳥の声

や、虫の姿さえ見かけなかった　　あまりにも静かな森　　気持ちが悪いほどに。

「ここにはまともな生き物はいねえ。獣や虫は人より敏感だからな、ここには絶対に近づかない。杜の木の本一本が御開祖様の神通力を分け与えられた神木で、妖気を吸い取って他へもらさない。代々の領主や杜人は、この杜に沸いて出る妖を狩るのが役割だ。だから、『お狩場』なんだよ」

「　　なんで、そんなこと」

わずかな時間、足を踏み入れただけでおかしくなりそうだった森を、棲家とし、妖怪を狩る。そんな生活をしなければならぬのか。袖月には分からなかった。

「知らねえのか　この地は妖の気配の濃い土地也。未来永劫、子々孫々まで、この地を守護し、人を守れ。されば人の心と姿を与えん　大昔の契約だ」

槌也が口ずさんだのは、土蜘蛛の段で有名な一節だった。

この杜があるからこそ、土御門は国替えも、領地没収もない。尋常の人間に治められる場所ではない。

「とにかく、杜をでろ。連れて行ってやるからよ。後は大人しく縛につくなり、生まれ故郷に戻るなり好きにしろ」

その言葉で袖月は天主との取り決めを思い出した。

「天主様！」

奥へ駆け出そうとした袖月の襟首を引っつかみ

「馬鹿野郎！　死にてえのか！」

怒鳴りつける槌也であった。

「お、奥に天主様が！」

「あん　？」

歯の根も合わぬほど震えながら、袖月は涙をこぼしながらかたつた。

「ここには、村人も、役人もこないし、丁度良いからって　小屋を作って、いざというときはそこに　」

そこに身を隠す手筈だった。

仕事が成功しても、失敗しても、後はそこに潜み、天主様のところに人をやって判断を仰ぐことになっていたので。

槌也は舌打ちした。

「それか　もうひとつは」

杜の中に小屋のようなものが作られかけていた　いまはもう残骸だが。それを作るため、何人も杜に出入りしたのでだろう。

木を切り、土地をならし、小屋をかける。突貫工事をするために、何人杜に入り込んだのやら。

そうして人が集まれば、そのにおいにつられ、妖がわく。

普段なら、結界に残る槌也の気配に怯えて引つ込むところだが、袖月が霊糸を片付けてしまったため、こちら側にとどまっている。

「もう無理だ……いくら天主様でも、この数じゃあ」

呆けていた信者がポツリポツリと言葉を口にし始めた。

「天主様なら……逃げてるはずじゃあ」

「じゃあ、なぜ我々を救ってくださらない」

「どうするんだ、こんな化け物の中に」

「天主様は、我々を見捨てたんだ」

天主への信仰を投げ捨て泣き叫ぶ信者に、袖月は青ざめた。

天主が見せた奇跡の全ては袖月の力だ。本当に天主がなにかの力を持っていたかは、袖月でさえ知らない。

もし、奇跡の力を持っていないとなれば　ひとたまりもない。

槌也が信仰に止めを刺した。

「諦める。かわいそうだが、手遅れだ。一日や二日じゃねえ、もっと前にやられてる」

「いやあああ！」

袖月は暴れたが、槌也の戒めはびくともしなかった。

「天主様！　天主様ああああ！」

「いい加減目え醒ませ。もう死んでる。天の使いなら、妖怪ごときどうにかできるだろう。御開祖様は妖力を奪い取る神通力があつた

そうだからな。食い殺されるってことは、騙りだ」

「放してよ！ 天主様がいなくなったら、あたしの居場所、なくなっちゃう！ ただの化け物になっちゃう！」

「化け物だあ？」

正真正銘の化け物を見て、まだそんなことを言うかと、槌也は顔をしかめた。

「怖くないの？ あたしは、化け物なんだよ、やろうと思えば、あんただって殺せる！」

槌也は眉をひそめ、柚月の肩を掴み引き寄せた。肩口の辺りに顔を寄せ、においを嗅ぐ。

「なんだ、まつサラの人間じゃねえか。何が化け物だよ。混じってりゃ、わかるぜ」

行き成り、息がかかるほど顔を寄せられ、硬直していた柚月は激昂した。

「なつ、何するのよ！」

若い女の羞恥だが、槌也にそんな心配りはない。

「確かめたんだろうが！ お前からは人間の匂いしかしねえよ。何が化け物だ。お前は人間だ、人間！ 人を馬鹿にするんじゃないよ。真贋ならもちろん、混じってもいねえじゃねえか」

柚月の能力を知っているはずなのに、槌也は断言した。

それは、ずっと、誰かに言っただけの言葉だった。

天から与えられた力を持つものでもなんでもなく、ただの人間だと。

「これ以上、馳走の匂いをふりまくな。そうでなくとも血臭で、普段ならよってこないのが、入ってきてる。今この土地で妖を狩れるのは、俺らだけだ。仕事を増やすな」

槌也は風丸と五藤を振り返った。柚月の背を二人に向かって軽く押す。

「こいつらを頼むわ。奥の手でも何でも使って、外に出せ」

「若はいかがなされます？」

槌也は好戦的に笑った。

「土御門の役割は、杜の守護。妖怪を狩ることだ。小屋の跡に、溜まっていやがる」

「ちよつ、今、化け物が」

止めようとすると袖月に、槌也は鮮やかに笑って見せた。

「化け物は土御門はけものに任せな。袖月おまえは来るんじゃねえ」

人間は、立ち入るべきではない領域だ。

「ご随意に。後で援護にうかがいます」

風丸が一礼すると、槌也は杜の奥に向かって駆け出した。

槌也の笑顔に吞まれていた袖月は、我に帰った。

「ちよつと、いいの、一人で！」

「かまいませぬ。若をどうにかできるほどの妖怪ものは、感じませぬ」

「むしろ、血に酔うほうが、心配だ」

真に恐ろしいのは、土蜘蛛の化身である槌也のほう。毒をもって毒を制するというが、それは常に危うい均衡にたっている。それを知らぬ袖月は激昂した。

「なによそれ！」

「そう思うのでしたら、とつとと、杜を出てください。あなた方が外に出たら、援護に向かいます」

風丸は冷たく言うのと、腰を抜かしているほかの信者を振り返った。

「立ちなさい。いくらわたくしでも、十余人は運べない」

「もうおしまいだ……ああ……家を出るんじゃなかった……」

「泣き言を言っている暇はありません」

風丸の気がそれたのをいいことに、袖月は奥に向かって走り出した。

「おい！」

「仕方ありませんね」

風丸は懐から横笛を取り出して口に当てた。

清涼な音が響いて曲となる。

それを耳にした十数人の信者の表情が痴呆のように緩む。ふらふ

らと立ち上がり、一斉に同じ方向に向かって歩き出した。

「効かぬぞ」

袖月の姿は杜の奥に消えていた。

「超常能力者には、わたくしの笛は効きませぬ。若の通った後でもありますし、あの娘自身にも妖に抗する力があるようですから、放っておきましょう。今はこの人数を何とかいたしませぬと」

「そうだな」

冷たいようだが、二兎を追うものは一兎も獲ずという。

風丸三弥は？ 舞人？ であり？ 楽人？ でもあるのだが、他人を連れて？ 跳べる？ 卓越した舞人の能力にくらべれば、？ 楽人？ の能力は並で普通人を操れる程度だ。

「何かあれば？ 飛ばせて？ いただきます。そのときはご容赦を」

「わかった」

五藤は返事をする、振り返りつつ抜刀した。信者に飛びつこうとした小さな異形のを斬り飛ばす。

「急がせろ、よってきた」

その光景を身近に見ているはずの信者は、うつろな瞳のまま、歩き続けた。

人心を操るのも、また鬼の妖力のひとつである。小角では？ 楽人？ と呼ばれる能力だ。

「わたくしどもの気配を感じても近づくとは、よほど自信があるのでしょうか？」

人の姿をしていても、風丸も五藤も鬼の一族だ。

「人の味を覚えたか。闇雲に襲ってくるぞ」

身の程を知らぬ小物を五藤は斬って捨てる。五藤の能力は？ 金剛身？ だが、それは持って生まれた神通力。その才能は別にあり、剣の才だ。本来なら普通の刀では傷つかぬ妖を、剣気をこめた刃で切り刻む。それは本来剣鬼と呼ばれる人間が目覚める力だ。

五藤は修練によりそれを体得した。

小角の中でも、そんな力を持つものは他にない。それゆえに、最

強にもつとも近いとされる。

風丸もまた刃を抜いた。

風丸が使うのは小太刀。無名の名刀ではある。もとは守り刀として打たれ、？魂の入った？一品。与えられる人を思うてか、魔を断つ力の宿ったもの。

風丸の姿が消えうせ、先頭の信者に飛びかかるうとしていた妖怪の背後に現われる。風丸は妖怪を突き、一瞬後には横合いから別の信者にかかるうとしていた妖怪を突く。

風丸に間合いも何も必要ない。

霊眼の導くまま、相手の一番の急所の位置に？跳び？刃を突き立てる。一撃必殺、次の瞬間には別の妖を突き伏せる。一人で数人もいるのではないかと思わせるその神通力^{ちから}。

舞人とはよくぞいったものだ。

風丸は、槌也の補佐ではあるが、万が一槌也が心まで土蜘蛛と成り果て、『悪しき先祖帰り』となったときは、命を奪う役割をする。その後は、後任の守人となる。

その任を命じられただけあって、風丸も小角の一族では力のある方だ。常日頃は槌也の意図を汲んで手出しししないだけ。

まわりつく妖物を切り捨て、血路を開きながら二人は信者たちを杜の外へと誘導した。

人外の力に守られながら、信者たちは恐れも慄きもなかった。

このまま彼らは杜の外へ行き、予め刷り込まれた選択をする。

風丸はそういうふうな条件付けした。

風丸が弾かれたように後ろを向いた。五藤もだ。

「若！」

「気配が変わった！　まずい」

蜘蛛と鬼（後書き）

土御門と小角のお仕事です。土御門はここだけです、小角は全国津々浦々まで走り回って妖怪退治しております。これに北の隠居様の異能者で構成された組織がサポート要員としてがんばっているのです。

蜘蛛の本性 土御門の業

その場所に近づぐごとに血臭が強くなっていた。一人二人ではない、数十人の犠牲者が出たはずだ。血の匂いは新鮮なものではないが、そこを指して人が来ると覚えた妖怪ものが、そこを根城にしているのだろう。

人の味を覚えて増長したか、動くものならなんにでも飛び掛る小妖怪ものが、槌也めがけて飛び掛ってきた。

槌也は一瞬で斬って捨てる。

もう何匹始末したか覚えていない。

感じるのは疲労より、体の奥からふつつつと滾る何かだ。

(やばいな、楽しんでるぜ、俺)

頭の隅でそうは思うものの、足は止めない。血の滾りはときとして本性の現われるきっかけになってしまう。だが、今は、それを抑える必要はない。

いくつもの妖気を感じた。もともとそうなのか、あるいはこちらで滋養をつけてのものか、いくつかは強そうだ。

木立をぬけると、壊された小屋の残骸があり、そこに異形のもの達たちがいた。

「いたなあ、一匹も逃さねえ」

槌也を人と見誤ったか、その敵意に反応してか、そいつらが槌也めがけて牙をむいた。

槌也は霊糸 否 人を傷つけぬための配慮をなくし強化した

すでに妖糸といていい をばら撒いた。

力のない妖怪は触れるだけで切り刻まれ、多少力のある程度の妖怪は巻きつかれて身動き取れなくなる。そこを夜叉丸で妖糸ごと斬る。

あつという間に小妖を片付け、槌也は手ごたえのありそうな妖怪に刃を向ける。闇雲にかかってこず、距離をとっていたものだ。

「ちったあ、知恵のあるやつもいるか」

それは武者と螳螂を足したような姿をしていた。基本的には人に近い姿をしているが、両腕が螳螂の鎌になっている。顔も人のそれではなく複眼が虫のようだ。

硬そうな外殻をしているが、魔のそれは夜叉丸で斬ることができ
る。

面倒なのは、翅で飛び回る楕円の虫のような妖怪だ。不規則なそれは軌道が読めない。

そのほかにも獣と人間を足したような奴もいる。残ったのは八匹ほど、人の形に近い奴が多いのは、その方が人と見誤って人が近づいてくるからだろうか。

狼と人を混ぜたような形の妖が、後ろから槌也に飛び掛ってきた。常人ならその顎に捕らえられる所だが、槌也はそれを寸前でかわし、腹を薙ぐ。

後ろを向いた隙に武者螳螂が鎌を振り下ろすが、槌也は傷口から腸をぶちまける人狼の体の半分を盾にする。

武者螳螂の鎌がそれを両断する間に踏み込みのための距離をとり、斬りかかった。

刃と鎌が交差した。受けた鎌が別方向へ力をかけ、刃筋が合わなくなつた。

刀は横腹への衝撃に弱い、夜叉丸は魔剣とはいえ強度は普通の名刀と変わらない。とっさに力に逆らわずに衝撃を受け流したため、鎌の途中で刃が止まり、鏑迫り合いの形になつた。

そこへ、横合いから別の妖怪が、脇腹めがけて先端が錐状になつた脚を突きこむ。それを槌也は掴みとめた。

両手に握つた夜叉丸にさらに力を込めて鎌の刃を押し切つた。掴みとめていた虫のような形をした妖怪は、脚を引き千切る。

奇怪な泣声をあげて妖怪が一度離れる。

槌也は夜叉丸を構えなおし、持っていた脚を捨てた。その着物の前が開いて、脇腹から新たな二対の腕が伸びていた。その姿は六

臂　　槌也は着物を裂いた。この姿では動くのに邪魔になるのだ。虫型の妖は辺りを飛び回り、武者螭螂も距離をとって威嚇する。「仕切りなおしといこうか」

槌也は獰猛な笑みを浮かべた。

屍が道標のように落ちていた。いずれも見事な太刀傷で仕留められている。槌也がこの道を通ったのは間違い無さそうだった。

なぜ、自分が槌也を追いかけているのか、袖月には説明できなかった。

この先は危険だ、本当なら杜の外に出る方が安全ではある。ただ、これほど危険な場所に一人で向かった槌也を思うと、放ってはおけなかった。

もともと人が手入れしている道ではないから、伸びた枝が着物や袴にかかる。引つかかった袖や袴を無理に引つ張ると、しなつた枝が頬やむき出しの皮膚に軽い引つかき傷を作った。

袖や袴の裾がこれほど邪魔だとは思わなかった。

初対面するとき、槌也の格好に呆れたものだが、それなりに理由があつたのだと袖月は思った。

追いついて、なにができるのかも考えていなかった。ただ、追いつくことだけを考えていた。

(なんて、脚、してるのよ、全然追いつけない)

息を切らしながら走り続け、小屋を作るため切り開いた場所に到着した袖月は、修羅を見た。

槌也が学んだのは真つ当な剣術だったが、剣術というものはそもそも人を相手に工夫されたもの、妖怪を相手にするには新たな工夫がいるものだ。

槌也のそれは妖怪を相手に戦っているうち別物になっている。

武者螭螂の一撃を後ろに大きく跳んでかわした槌也に、虫妖が一直線に突っ込む、槌也は空中でぐるりと軌道を変えた。

妖系がそれを可能にしているのだ。

虫妖は刃に突っ込む形になり己の勢いで半ばまで二つにされた。真ん中の腕がそれを掴み裂く。

六臂の姿になった槌也は上の一对で夜叉丸を操り、真ん中の一对で力任せに相手を引き裂いた。残る下の一对が妖系を繰り出す。

二つにされた虫妖の体が血飛沫を上げながら落下しても、槌也の体は妖系に支えられ空中にあった。

もともと槌也の気で作られたものだ、主の体を離しはしない。木立に張られた妖系の全てが槌也の足場だ。

さらに新たな妖系を繰り出し足場を増やす。その下を 逆さまになりながら槌也が疾走する。狙いは武者螳螂 だが、蝙蝠のはねをもつ妖怪が後ろから飛び掛る。

槌也は振り向きもせず妖系を投げつけた。

さすがに妖系に切り裂かれることも、まとわりつかれることもなく、引き千切る。

妖蝙蝠の動きが一瞬鈍っただけのこと。

槌也にはその一瞬で十分だった。

蝙蝠の片羽を斬りおとす。妖蝙蝠はきりもみ状に落下して、槌也はその上に飛び降り、地面に繋ぎとめるように、頭に夜叉丸を突きたてた。

これで三つ。

いつの間にか槌也の眼は赤く染まっていた。

動きの止まった槌也に、角のある四足の妖怪が飛びつくが、その角を掴みとめられた。

妖怪達は連携しているのではない。

ただ、他のものに気をとられているとき、止めを刺すとき、が、一番隙があるのだ。それを本能的に察知して、襲ってくるだけのこと。

結果的に連携になることもある。

そのまま支点をそらし、後方へ投げ飛ばす。それが、他の飛び掛

ろうとしていた妖怪にぶち当たる。

今の槌也に死角はない。

物を透かしてみる眼と、張り巡らした妖系の網すべてが槌也の感覚器官に等しい。

地面にまで貫通していた夜叉丸を引き抜き、一息に間合いまで飛び込み、立ち上がるうとしていた四足を真つ向から、唐竹割りにする。

顔面に血を浴びて、槌也は笑った。抑えきれない狂笑の発作に見舞われた。

「楽しいよなあ？」

同意を求めるように妖怪に話しかける。その目に怯え、妖怪が引いた。

けたたましい笑い声とともに、槌也は颯風となって荒れ狂った。

夜叉丸は銀の軌跡を残して流れる死の閃光となり、手に触れるものすべてを引き裂いた。

「あーっはーはっはっは」

血に酔う修羅は瞬く間に面前の妖怪を細切れの肉塊に変えた。

巨大な猿のような妖怪が木の上から槌也に飛び掛ったが、その腹を救い上げるように斬り裂き、副腕が傷口を広げた。腸をぶちまけた妖怪の首を素手でねじ切る。

槌也は残った妖怪に赤く染まった眼を向けた。もはや槌也を人に見誤るものはなく、それは妖怪同士の殺し合いだった。

武者螳螂が背中中の翅を羽ばたかせた。凄まじい速さで飛び、残った鎌で切りつける。

人を遙かに超える速さで体をさばいて鎌をかわし、刃のない腕にあたる部分の根元を掴んで引き倒す。邪魔な翅を斬り飛ばし、その頭を斬ろうとして横合いから跳びかかってきた虎と人を混ぜたような妖怪の爪をかわすため武者螳螂を離れた。

わずかに爪が頬に傷をつけたが、二撃目は夜叉丸で弾いた。相手の体が崩れた所に拳を見舞うが、さすが人虎、敏捷に後ろへ跳んで

逃れた。

槌也はそのまま追撃する。人虎はさらに後ろに跳ぶが、一瞬、動きが鈍った。そこにあつた妖系の網に自ら跳びこんでしまったのだ。槌也の突きが腹に入った。

人虎が絶叫して槌也の背に爪を振り下ろす。槌也は夜叉丸を引き抜き、爪をかわした。

その腕が跳ね上がり、人虎の腕を斬り飛ばす。その直後、武者蠃螂の体当たりをくらい、さすがに弾き飛ばされた。とっさに槌也は武者蠃螂の残った鎌の方の腕を掴み、引き千切ろうとして、噛み付かれた。槌也はその首を捕まえようとして手を伸ばし、武者蠃螂が銜えていた手を離して逃れた。

ひとまず離れ、呼吸を整える。
頬と副腕、傷を負うのも久しぶりだ。

人虎は腹と片腕、武者蠃螂は鎌の片方と翅。核となる急所を突かない限り、この程度で妖怪は死なない。

殺さなければ、殺される。

人虎が立ち木を足場に高みに駆け上がり、攪乱のためか枝から枝へ駆け回る。

武者蠃螂はカマを大きく上げて威嚇する。

夜叉丸を構えた槌也は顔を武者蠃螂に向けたまま、人虎の動きを警戒した。

人虎が枝をけって槌也に飛び掛る。と同時に槌也は地をけり、武者蠃螂に迫っていた。武者蠃螂は鎌を振り下ろすが、槌也は身をひねって武者蠃螂の横を抜ける。槌也に逃げられた人虎は、間髪いれず地を蹴って槌也を追撃。武者蠃螂の横をすり抜けた槌也は武者蠃螂の背に体当たりを食らわせる。人虎と武者蠃螂が衝突した。

槌也を狙ったはずの人虎の爪に顔面を切り裂かれ、武者蠃螂が絶叫した。

棒立ちになつたその体を槌也は両断する。その武者蠃螂の体を押

し付け、人虎の爪を封じた槌也は、武者螳螂の鎌を引き千切り、人虎の目に突き立てた。

目をつぶされた人虎は刺さったままの武者螳螂の体ごと、残った腕を振り回す。

さすがの槌也もいったん距離をとる。

大きく跳んで妖系の足場を駆け上がり、はるか高みから妖系をばら撒く。そして、妖系を引き上げた。妖系の先、からめとられた死んだ妖怪の体が、いつせいに人虎に殺到する。いくつかの体が滅茶苦茶に振り回される腕に潰され、いくつかは人虎に当たって動きを鈍らせた。

槌也は上空から飛び降り、人虎の脳天を串刺しにした。

人虎の体が倒れると、そこにはもう生きているものは槌也だけだった。

全身血にまみれ、口の中にすら血の味がした。それは普段口にするどんなものよりも美味かった。

「……あはは……くく……はは……」

堪えきれずに、槌也は天を仰いで、笑った。笑い続けた。

天を仰いで狂ったように笑うその様は、まさに修羅だった。

蜘蛛の本性 土御門の業（後書き）

槌也の能力全開です。ここぐらいまでが正気で使える力ですね。これ以上は暴走して蜘蛛の本性に戻る恐れがあります。イメージでは暴走した姿も思い浮かぶのですが、筆力と画力がありませんので皆様にお伝えできず、ひじょーに残念です。

ああ、文才と画才が欲しい！！

真の敵 小角の役目

一時の熱狂が醒めると、槌也は副腕をしまった。眼も黒に戻す。土蜘蛛としての能力を開放するのはあまり好ましいことではない。あまり使いすぎると、槌也の制御を超える。

そうなれば、最悪の場合、土蜘蛛の性にのっとられてしまう。やっと槌也は一息ついた。

息を飲む音がして、槌也は反射的に振り返った。

そこに柚月がいた。

見られた と思う前に、体の奥からの衝動に槌也は耐えなければならなかった。

まずいことに、柚月は怪我をしているらしい。微かに人の血のおいがる。

戦闘で昂ぶった気が、若い女と新鮮な血の匂いで、刺激された。静めようとしても、体の昂ぶりはおさまらない。

(だめだ とまらねえ)

「ぐううう！ くううう！」

体が妖化を始めた。

なまじ一部開放したばかりだったため、それは槌也の思い通りにはならなかった。槌也の制御を外れて蜘蛛の性が暴走を始める。

音を立てて体が変わり始める。

「きやあああああああ！」

柚月が絶叫した。

「……だから、来るなど言ったんだ……」

槌也は呆れたように呟いた。その右腕は黝い剛毛に覆われ、指先が鋭い鎌のように変化していた。それはじわじわと浅黒い槌也の肌を侵食するように広がっていった。

「なになになに、なんなのそれは！」

「……この邦のお偉いさん達が……隠してるもんだ……建国神話を

知らんわけじゃあるまい」

顔を歪め、大きく肩でをしていた槌也はがくりと膝をついた。左手で変化の留まらぬ腕を掴む。

「でっ、でも、あれは、御伽噺で」おとぎばなし

「御伽噺に真実が含まれていないと思っていたのか？ あれは、警告を秘めた物語だ」

袖月は震えた。

御開祖とも初代とも呼ばれる最初の皇帝。妖怪に苦しめられる人々のため降臨し、成敗した妖怪を人に変え従えたという御伽噺。邦を築いた後、その元妖怪であった配下を大名にしたという伝説。

御伽噺 力ある者達が自分たちを神格化するための作り話だと思っていたそれは 真実なのか。では 自分たちがしようとしていたことは

「わかつたみてえだな。そうさ、皇帝と葵の御三皇家がなくなれば この世は再び妖怪変化の跋扈する邦になっちまうのさ。そんな世の中が欲しいのか それがあなたの言う開放か？」

ぎりつと槌也は唇を噛んだ。その歯さえ、牙に変化している。

「おせえ！ 早くきやがれ鬼どもっつ！ 戻れなくなっちまうだろうがあ！」

槌也の性は土蜘蛛だ。人食いの、鬼を除けば最強の一族に当たる。先祖がえりである槌也の本性を押さえ込んでいるのは、皇帝の血に他ならない。

今にもその本性に立ち返り、目の前の人間。すなわち袖月、を襲ってしまいそうだった。

視界が紅く染まってゆく。

喰らいたい。

本能が叫ぶ。

だめだ。袖月を喰うわけにはいかない。

押し付けられたはずの人としての心が叫ぶ。

獲物。極上の獲物。

袖月だ。これは 俺の

「逃げる！ 俺が俺でいるうちに！ いや、殺せ！ 早く！ 俺を殺せ！ 心が人のうちに！ 袖月！ 俺にお前を喰わせるな！」

半泣きの袖月の掌に力球の輝きが生まれた。槌也に袖月の力が効かないというのは、槌也にそれを防げる力があるということだ。あえて避けなければ、仕留めることもできる。その輝きを見て、槌也はむしる救われた気分になった。

袖月を喰わずにすむ

しかしそれは袖月の手の内で霧散した。

「袖月！」

「やだ！ やだ！ やだあああ！ あたしに殺させないで！ あたしに、あんたを殺させないでよおおお！」

「袖月！ 俺は化け物だぞ！ 人食いの、化け物なんだ！ 早く殺せ！ さもないと、お前を喰っちゃう！」

袖月は耳を塞ぎ、地面に突っ伏して泣き叫んだ。

「やだあああ！ 化け物だって、槌也だもん！ 殺せない！ 殺させないでよおおお！」

すでに自分の目が紅く染まっていることを槌也は自覚した。脇腹がざわめくように波立ち人間にはありえない第三、第四の腕が生まれようとしている。一刻の猶予もない。

槌也は夜叉丸を掴むと、自らの喉に突きたてようとした。

いくら化け物でも、首をやれば死ぬ その刃が掴み取られた。

「若！」

それは一瞬前にはいなかったはずの風丸だった。

その姿を認めた途端、槌也はものも言わず、風丸の手の甲に喰らいついた。

血がしぶいて、槌也の顔を染めた。そして、その喉が数度上下する。

槌也が風丸の血を啜っているのだと、袖月は気づいた。ついに槌也は土蜘蛛に成り果てたのか 風丸を喰らうつもりなのかと、袖

月は全身の血が凍りついた。

劇的な変化が起こった。

黝い剛毛は、まるで肌を侵食したときを逆さにしたように消えうせてゆき、指が元の人のそれに変わる。新たな腕を生もうとしていた脇腹も人のそれに戻った。

柚月の脳裏に講談のある一説がよみがえった。その血をすすりますると摩訶不思議、たちまち鬼は姿を変え。それは鬼神の段の講話の一説だったが、今まさしく、柚月が目撃したものだ。た。

誰もが知っていながら、誰もが信じない御伽噺。それでも目の前で起これば、誰もがそのわけを知っている。

この話が広められたわけを柚月は知った。

槌也が風丸の手から口を離れた。そこに覗く歯も、発達した犬歯以外は人のものだ。まぶたが開き、黒い瞳を覗かせる。

「遅い」

「申し訳ありません。そちらのお嬢さんの仕込みの後片付けに追われまして。間に合ってよかった」

「終わったのか？」

「いえ、終わりそうもなかったので、押し付けて、跳んできました」
風丸はそれだけを言うと、掌に青白い光を宿らせた。その手を傷にかざすと、見る間に傷が消えていく。風丸は？癒し人？でもあるのだ。

おそらくは、槌也の気配の変化を感じ取り？跳んで？来てくれたのだらう。

一先ずの危機は去った。

残るのは。槌也は風丸に向き直った。

「三弥、頼む」

柚月が忌まわしい事柄。自分や天童教に関わる全てのことを忘れ、普通に暮らしていけるように

「こういふときだけなんですから、わたくしの名を呼んでくださるのには。無理です」

風丸は拗ねてそっぽを向いた。

「三弥」

「超常能力者とか、皇家筋の方には？楽人？の能力は効きづらいのです。鬼成様もそうでしたでしょう。それこそ皇家筋の方に、曲がりなりにも力が効くのは、華菜様くらいなものです」

「誰だ？」

「若君の生母君であらせられます。？楽人？としては、当世一の力を誇る方で……まさか、華菜様にご足労願うわけにも行きますまい」

「だがよ……」

「心配ありません。その方は稀有な能力の持ち主。この度のこと、口外さえしなければ、いくらでも落ち着き先は見つかります」

槌也は返答に困った。

袖月がそれを納得するとは思えなかった。

「あんだ　土蜘蛛の化身なの？」

「そうだ」

「だから、皇帝に仕えて、ここを護ってるの？」

この地は妖の気配の濃い土地也。未来永劫、子々孫々まで、この地を守護し、人を守れ。されば人の心と姿を与えん　伝えられる初代と土御門の契約。それが未だに生きている。

「そうだ。俺の中には、人を旨そうだと思っちまう衝動と、それを嫌悪する倫理（じゆんり）が同居してんだよ。後のほうは借り物で、本物の俺は化け物だ。俺は　それが恐ろしい」

己の中に潜む本性に乗っ取られ、いつ、心許したもののさえ貪る妖怪変化に成り果てるか分からない、その恐怖。

「だから一人で、こんな所にいるの？」

間違つても人を襲わないよう、人のいない妖怪の棲家で、人の心を抱えている。

「一人じゃない。こいつがいる。俺も小角（おに）どもも、曲がりなりにも人の真似事をしていきたいのなら、皇帝に仕えるしかない　いつ本性に戻るか分かったもんじゃねえからな」

柚月は涙を流していた。

「悪かったな。怖いもん見せちまって」

槌也は座り込んだままの柚月に手を伸ばしかけて やめた。柚月が、化け物に触れられるのを嫌がると思ひ直したからだ。血塗れの化け物 それが槌也だ。

「忘れさせてやりたかったが、無理だそうだな。それでも天童教の事は忘れな。そうすればいくらでも生きる道はある」

「あんたは ずっとこのままなの」

「そうだな。くたばるまでは、このままだ」

柚月は 力を使わなければ、普通の人として暮らしていける。

今なら力を隠すくらいの分別はある。その気になれば、全てを忘れてたふりをして人にまぎれ生きていける。けれど槌也は

「 泣くなよ。困ったな、悪かったよ、怖がらせて」

「違う 怖くなんかない」

悲しかった。なぜか分からないが ただ、悲しかった。

真の敵 小角の役目（後書き）

あらかた終わりました。後は後日談みたいなものです。

後日談 新たな住人

杜に入り込んでいた刺客達は気がつくとも杜の外に立っていた。自分が何者で、どうしてこんな所に居るのかもあやふやで ただ選択をしなければならなかった。二つの道のいずれかを。

そして彼らは自ら選んだ道を進んだ。

ひとつの道を選んだものは、自分が天童教という教えに従っていたことを覚えていた。そして、その教祖が死んだということを知っていた。彼らは自ら出頭し、縛をうけた。

ひとつの道を選んだものは、なぜここに自分がいるのか分からなかった。すつぱりと、数年分の記憶が抜け落ちていた。ただ、生まれ故郷に帰らなければならないと、帰路に着いた。

「それで、どう始末がついたんだ？」

「柿崎様は自害なされました。お家は断絶とか。天道教は教祖が信者を道連れに殉教。残った信者はどこにもおりませぬ。もしかしたら、物忘れにかかった家出人が故郷に帰ってくるやもしれませぬ」

「 という事にしたわけか。ご苦労だったな。まあ、それはそれでいいとして 」

槌也はちらりと風丸の横に視線を走らせた。

「 なんて、そいつがここにいる 」

「 わたくしは知りません。槌也様の新しい下働きだそうです 」

珍しく不機嫌に風丸がそつぽを向く。

両手に抱えられるだけの荷物を持った袖月は殊勝に頭を下げた。

夏姫の一連の出来事は、守之の裁量で柿崎を断罪し、すでに教祖を失った天道教は、残った信者は見つかり次第、風丸が記憶の差し替え、洗脳などを駆使し、散会させた。

残ったのは、？楽人？の力の及ばぬ袖月だが、これは貴重な超常能力者ということで、小角が取り込むか、北の御隠居の裏組織に組

み込まれるものと思っていたが、意外にも槌也の預かりとなったのである。

「？心話？を使える小角を介し、皇都の皇帝、西州の当主、北張のご隠居と、土御門の守之の極秘の会議での決定だ。」

「本人も皇都に行きたくないというし、事情を知っている者を野放しにはできんだろう。」

「口ぞえしたのは、今日皇都に立つ予定の五藤だ。」

「北の隠居がよく承知したな。」

「北のご隠居の肝いりだ。」

「はあ？ 一番文句を言いそうな相手じゃねえか。なんでまた。」

「当て推量で、かまわぬか？」

「ああ。」

五藤は心なしか頬を染め、視線をはずした。

「聞いたことがある。名馬の産地では、かけ合わせたい馬同士が中々その気にならぬ時にだな。別の馬でその気にさせておいて、目当ての馬とかけ合わせるといふ。」

槌也が抜刀した。刃と刃が打ち合う、澄んだ音がした。

「 袖月が当て馬で、かけ合わせるのが、夏姫だったのか。俺は種馬か！」

「俺に当たるな。なにせ、我らの若に春画の束を送りつけるお人だぞ。」

「罅迫り合いの形のまま、五藤がぼやいた。」

「なんだ、そりゃ？」

「最初はその、その道の指南役をだな、派遣するおつもりだったよ。うだが、西州様のご意見なされて春画に妥協なされたそうだ。」

「 槌也は毒気を抜かれて刀を引いた。」

「小角の若の相手って、実の孫だろうが。まだ十……三か四だろう。そうまでして煽りてえかよ、血も涙もねえな。」

「 あまり……多くを言いたくはないが。」

五藤は刃を鞘に収めた。

「よく西州様は意見できるな」

「豪気な方だからな。それに西州様は、ご隠居の義理の甥に当たられる。ご隠居の亡き奥方が、西州様の叔母君だ」

「冷徹といわれる北張と、剛毅で知られる西州の姫。いったいどんな夫婦だったのか、無駄に興味はあるが、槌也には想像もできなかった。」

意外にも夫婦仲は悪かったという評判は聞かない。北張のご隠居には当主を継いだ長男に、他家へ養子にやった二男がいる。すべてとうに嫁いだ三女もいるが、すべて正室腹であるという。

「……北血筋か……夏姫もそうだけだよ、おめえの所の姫さんも冷徹なのか？」

「は？」

「あれで十五だつてんだから、恐れ入るぜ。命狙われようが、不義密通を命じられようが、びくともしねえ。北血筋つてのは、みなあなのかねえ」

五藤の顔が引きつった。

「いや、葉月姫は冷徹とは 氏より育ちというし」

五藤は自分自身の言葉に深く傷ついた。

（小角のせいかー！ 我らが姫が、ああまで雄々しく豪気なのは、小角のせいかー！ 我らはどこで姫の教育を間違つたのだー！）

小角猛流の許嫁、葉月姫は間違つても冷徹と呼べる性格ではない。頻繁に許婚の猛流を引きつれ屋敷を抜け出そうとし、隙あらば武術を学ぼうとする、むしろ豪気な姫だ。

気品の南戸の姫を母とする皇帝と、まさに北張の姫といわれる御台所のどこから葉月の性格が生まれたものか。

「どうしたい？」

「な なんでもない。気にするな」

「主家のことを外に漏らすわけにはいかないのであつた。」

「では、槌也殿、これで。また夏姫様が皇都に向かわれるさい、代

役にまいます」

「嫌な事を思い出させるなよ」

夏姫は土御門にいる。この三年、様々なことがありそうだった。特に、帰るさい皇都に送ってゆくのは、やはり槌也だろう。

「先が思いやられるぜ」

「槌也殿、たとえどんなことでも、己が後悔しない道を行くが、正しき道と存じます。己が信じる道を行きなされ」

金剛の鬼は爽やかな笑顔を残して帰路についた。その後姿が妙に清々しく感じたのは、槌也だけではないだろう。

「後悔しない道……ねえ」

槌也は袖月を振り返った。

「なんで小角についていかなかった？　ここは、妖怪の棲家だぞ」
槌也と風丸もそうだが、土御門の社は、邦を被う結界の結び目、魑魅魍魎の世界との門のようなものだ。

庵にはさらに結界を張ってはいるが、危険であることには変わらない。

「小角だって、鬼じゃない」

「違う　だが、命の危険はない。ここと違ってな」

「自分の命くらい守れる」

「そうか」

土御門に残るのなら、その力の効かない槌也の元に預けるしかない、釘を刺されている。

「好きにしろよ。後悔しない道が、正しい道だとさ」

「うん」

袖月は頷いた。風丸が非難を込めた目で槌也を見る。

槌也は溜息をついた。

夏姫はあきらめたわけではない。守之も加担しているとなれば、どんな手を使ってくるか知れたものではない。

苦難の三年は始まったばかりである。

そうして土御門の結界の社は新しい住人を迎え入れた。

後日談 新たな住人（後書き）

ありがとうございます。この話はここで終わりです。

鬼人伝の世界で帝都以外での小角の活動や妖怪の子孫達が何をしているのかというお話でした。実は封印の結び目はここだけではなかつたりします。同じような活動している小角もいれば、それ以外の妖怪の子孫もいます。

けれど、小角以外の妖怪の力はほとんど受け継がれず徐々に数が少なくなっていくています。

鬼人伝の世界のお話はまだ少しあつたりします。一部はもうひとつのサイトで掲載してもらっています。いずれまた何かのお話を載せてもらうかも知れません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2489n/>

鬼人伝外伝 蜘蛛草子 社の盟友

2011年4月28日10時55分発行